

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4

北講武氏元遺跡

1989年2月

島根県 鹿島町教育委員会

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4

北講武氏元遺跡

序

ご存じのよう鹿島町講武地区は、数多くの埋蔵文化財のあるところとして知られていますが、この地区で圃場整備事業が計画され、工事実施に先立って埋蔵文化財調査を実施してきているところであります。

このたびは、北講武地区での圃場整備事業に伴い、北講武氏元遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査では講武地区で最初に米作りを始めた人々の遺跡や、中世の足跡の残る水田跡など、古くからこの地で米作りをしていた人々の生活を偲ぶ資料が多数出土したというように聞いております。残念ながら、こうした貴重な調査例を現地で保存できない部分もありましたが、この記録をとおして、先人の労苦に思いをいたし、私達の明日への展望を開きたいものと思います。

終わりになりましたが、調査にあたってご協力いただきました土地所有者の方々、ご指導いただいた鳥根県教育委員会をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げて、報告書発行のごあいさつとさせていただきます。

平成元年2月

鹿島町教育委員会
教育長 袖本重幸

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が松江農林事務所の委託を受けて実施した講武地区県宮廻場整備事業に伴う北講武氏元遺跡の発掘調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字北講武 853-1、854-1、855-1、899-1、900-1、901-1に所在する。
3. 調査は、昭和63年4月21日から8月6日まで実働73日間を費して実施した。調査体制は以下のとおりである。

事務局 山本林市（鹿島町教育委員会教育次長）

曾田 稔（　　同　　社会教育係長）

調査指導 石井 悠（松江市立第二中学校教諭）

田中義昭（島根大学法文学部教授）

宮沢明久（島根県教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長）

鳥谷芳雄（　　同　　主事）

調査員 赤沢秀則（鹿島町教育委員会主事）

作業員 石橋一夫、石橋静夫、宮廻武男、古瀬 太、石橋静枝、石橋横枝、石橋寿子、曾田芳子、中村美代子、古瀬玉子、古瀬智恵子

遺物整理員 佐藤雄史、松山智弘（以上、島根大学学生）、中村暢夫、朝山千穂（以上、町立歴史民俗資料館）、瀬田明子

4. 調査にあたっては、土地所有者 古瀬熊雄、中村彰男、宮廻幸一、古瀬岩雄、古瀬 康、宮廻邦雄の各氏に終始多大なご協力をいただいた。また、松江農林事務所耕地第一課、株式会社豊洋建設の方々にも協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。
5. 報告書の作成にあたっては、東区出土遺物については、立命館大学文学部和田晴吾、家根祥多尚先生からご教示をいただき、また、調査区土壤中の花粉分析については、島根大学理学部大西郁夫先生のご紹介をいただいて、同学部地質学教室大学院生此松昌彦氏に分析していただいた。西区の水田検出にあたっては、島根県教育文化財課広江耕史、桑原真治両氏の助言を、土層の剥ぎ取りにあたっては、同柳浦俊一氏の協力をいただいた。以上、記してお礼申し上げたい。

目 次

序

I 調査の経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
1. 東区	6
土層	6
遺構	8
出土遺物	8
2. 西区	25
S D 0 1	25
S D 0 2	25
S D 0 3	28
中世水田	30
古代水田	30
S D 0 4	32
S D 0 5	33
S D 0 6	34
S D 0 7	34
S K 0 1	35
IV 北講武氏元遺跡の花粉分析	(此松昌彦) 37
V 小結	42

I. 調査の経過

鹿島町講武地区は、島根半島有数の水稻耕作地であり、鹿島町全体の水田面積 270 haのうち、講武地内が 183 haを占めている。このうち約半分については昭和30年代に区画整理事業が行われたが、依然として排水は不良のうえ、道水路網は不備であり、同地においての圃場整理事業の実施は関係者の強い要望であった。こうした要望をうけて昭和59年度から講武地区県営圃場整備事業が 133 haを対象として開始されている。

一方、この事業計画地域内には、点々と遺跡が存在しているため、関係者の度重なる協議を経て昭和59年度から以下のように発掘調査を実施してきている。

名分塚田遺跡第1次調査（昭和60年1月）

名分湯戸遺跡群発掘調査（昭和61年2～3月）

名分塚田遺跡第2次調査（昭和61年6～7月）

講武地区遺跡分布調査（南講武草田遺跡、南講武大日遺跡、昭和61年10～12月、国庫補助）

講武地区遺跡分布調査（講武川流域条里制遺跡、昭和62年11～12月、国庫補助）

昭和62年度の講武地区遺跡分布調査事業において、今回の調査対象である北講武氏元遺跡を発見した。関係者の協議の結果、昭和63年度中に北講武氏元遺跡発掘調査を松江農林事務所からの受託事業で、南講武草田遺跡の発掘調査を鹿島町の負担で実施することとした。

北講武氏元遺跡にかかる調査は、昭和63年4月21日から8月6日まで実施した。調査中、西区において、古代～弥生時代にわたっての多数の水路、中世、古代の2層の水田が、東区においては、縄文時代晚期～弥生時代前期の多くの遺物が検出され、記者公開、現地説明会、小学校児童見学会等を実施した。中世水田面に残った足跡は、「親子の足跡」としてマスコミでも取りあげられた。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積 180 ha の水田を有しており、半島部では持田川津平野とならぶ広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れ出す講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稻耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

北講武氏心遺跡は、この盆地のほぼ中央部の北寄りの谷に位置している。

この盆地をめぐっては、縄文時代早期から中期にかけての佐太講武貝塚が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖（『出雲國風土記』にいうところの「佐陀水海」、「恵曇波」の前身）をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣や堅果類を求めていたものと思われる。

弥生時代前期には、日本海沿いの砂丘地に古浦砂丘遺跡が成立し、ひきつづいて講武盆地西端に位置して佐太前遺跡が成立している。今回の調査により、この盆地内に縄文時代晩期からの人々の生活があったことが明らかとなり、この地域の歴史像は見直しを迫られることになった。さらに弥生時代のうちには、この盆地から少し離れるが、「恵曇波」の南岸の山ふところに銅鐸 2、銅劍 6 を埋納した志谷奥遺跡がある。再び講武盆地内に目を転ずると、弥生時代中期の遺物を出土した名分塚田遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期の南講武大日遺跡など、点々と集落遺跡の存在が明ら

かになりつつある。また、四隅突出型埴丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡が知られている。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内の開発がかなり進んだことを示していよう。特に名分地域には、奥才古墳群、鷺瀬山古墳群、名分丸山古墳群など前半期にさかのぼる古墳群が、北講武地域には、石棺式石室の講武岩屋古墳や、須恵器子持壺を出土した向山古墳など後期古墳が多く分布する傾向がある。この他、時期などは不明であるが、径 40 m 前後の古墳も知られてきている。

これら以外にも、横穴墓が多数知られており、

古墳時代後期の段階には現在の集落の原形がで

きあがるものと考えられる。

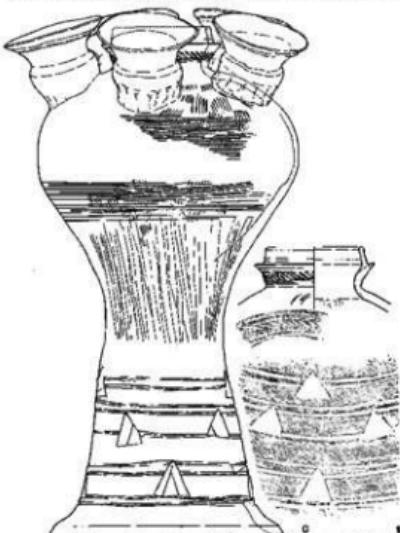


図 2 向山古墳須恵器子持壺



図3 北畠武氏元遺跡と周辺の遺跡（1/50000）

III. 調査の概要

今年度の調査は、昨年度講武地区遺跡分布調査事業（国庫補助事業）で発見した北講武氏元遺跡について実施したものである。

遺跡は、北方の向山と呼ばれる丘陵の末端からのびる丘陵上に位置しており、周辺は標高13~14mの水田である。

この水田に、講武地区遺跡分布調査事業による 2×2 mの調査区を設定したところ、第4調査区から、弥生時代前期および縄文時代晚期の遺物を含む包含層の存在が明らかとなり、所在地の小字名を冠して北講武氏元遺跡と名付けた。同年の調査において、さらに4ヶ所の調査区を設定し、遺跡の範囲を限定した（第1次調査）。

昭和63年度は、この知見をもとに同遺跡について、ある程度の面的な把握を試み、遺跡推定地を南北にはしる農道を境に、東区、西区を設定して調査にのぞんだ。

東区では、幅3mのトレチを延長100余mにわたって、一部重機を導入して設定し、約300m²を調査したが、東区東方では、包含する遺物はごく稀で、遺構も検出できなかったので、遺物を大量に包含する西方に重点を移し、東方については部分的な坪掘りを行って、包含層が発掘面以下にも存在しないことを確認するにとどめた。この東区西方では、有機土の厚い堆積があり、この層中およびその上層に弥生時代前期から縄文時代晚期の遺物が含まれていた。この有機土は、その下層に存在した小規模な水路が埋没した後に堆積したものと判明した。

西区では、南北15m×東西12mの調査区を設定した。現水田耕作土を除去した段階で、調査区東辺沿いに地山が現われ、この地山に掘り込まれた溝が検出された（SD01）。この溝の中には、奈良・平安時代の遺物が含まれていた。この溝と平行するように、古墳時代前期の溝（SD02）、弥生時代後期の溝（SD03）が順次標高を低くしながら存在した。これらの水路は、背後の丘陵の縁辺部の比較的高所に位置し、その下段の水田に配する給水路であったものと考えられる。このうちSD03の北端には、杭を密接させて打ち込んだ溜枡状の遺構が存在した。この部分で溝は、幅が広く、かつ深くなってしまっており、付近に存在した本水路から取水した水を一時的に貯えるなどの目的をもつて作られたものと考えられる。

また、調査区南西隅で部分的に上下2層の水田が検出できた。いずれの水田面も、上面が洪水によると考えられる砂礫で覆われており、この砂礫を除去することにより検出した。上層の水田では幅40cm、高さ10cmの畦畔が検出できた。この水田の時代は、これを覆っていた砂礫中に含まれていた土器質土器から、中世前半のものと考えられる。この水田面には当時の足跡が残存していた。下層の水田も、やはり砂礫によって覆われており、この砂礫中には、奈良時代の須恵器が含まれてい

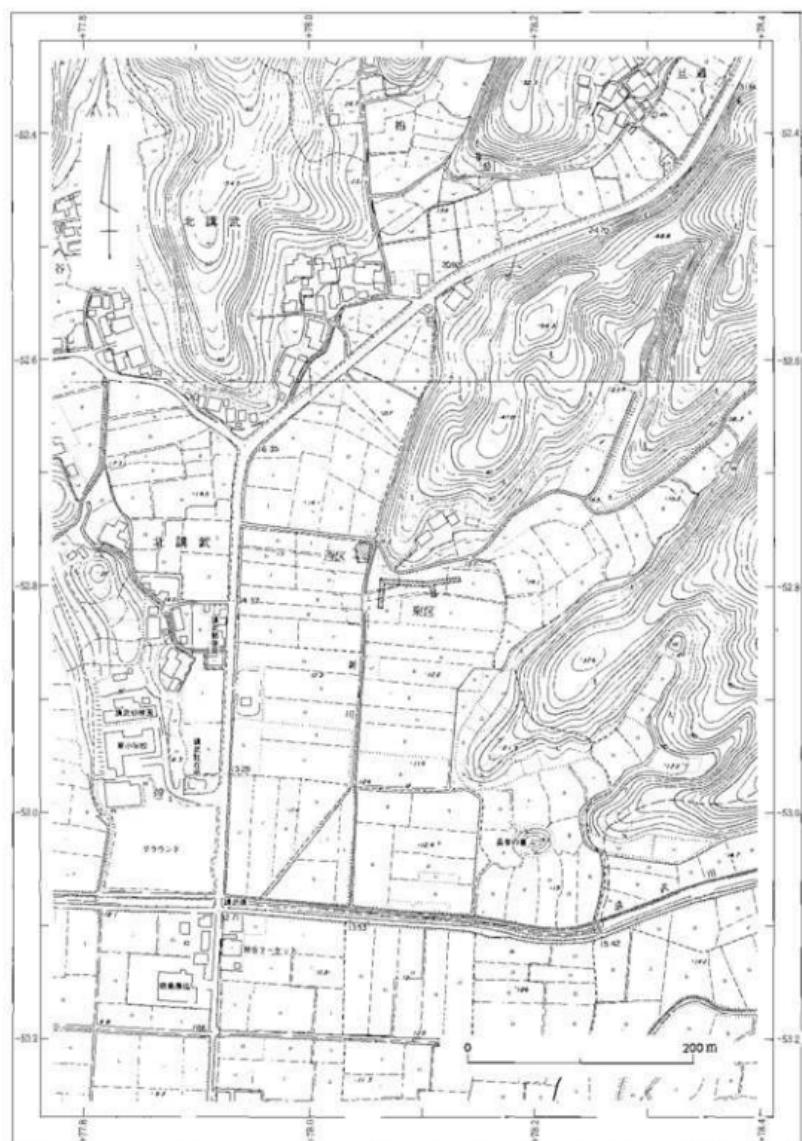


図4 北講武氏元遺跡調査区位置図 (1 / 5000)

た。水田面には、中世水田の畦畔に対応する位置にやはり畦畔が残存しており、水田区画の継承といった点で注目される。

これらの下層には、さらに前代の水路、土坑が埋没していた（SD04～07、SK01）。最古と考えられるSD07、SK01には弥生時代前期の土器が含まれていた。

1. 東 区

東調査区は、東西72mのトレントから、2ヶ所で南にのびるそれぞれ24m、10mの枝トレントを設定した。調査前は、標高13～14mの水田であった。周辺の地形をみると、北に隣接する向山丘陵の延長上に、水田面もわずかに高まっており、この微高地に調査区の西の部分が位置している。設定した調査区内では、東方にいくにしたがい、遺物の出土が稀になるので、遺跡の中心は、この微高地上にあるものと考えられる。

調査区西端では、向山丘陵から続くと考えられる淡黄褐色粘土の地山があり、ここを最高所として東および南にいくにしたがい、この地山は大きく降ってゆく。後述する縄文時代晩期から弥生時代前期の出土遺物の殆どは、この調査区西端に集中していた。調査区東方では、古墳時代から中世の遺物が検出されている。

土層 調査区西端付近では、旧地表から1.2mの深さに暗褐色有機土層が厚さ0.2～0.4mの厚さで堆積している。この層前後に縄文時代晩期および弥生時代前期の遺物が含まれている。（下層）。

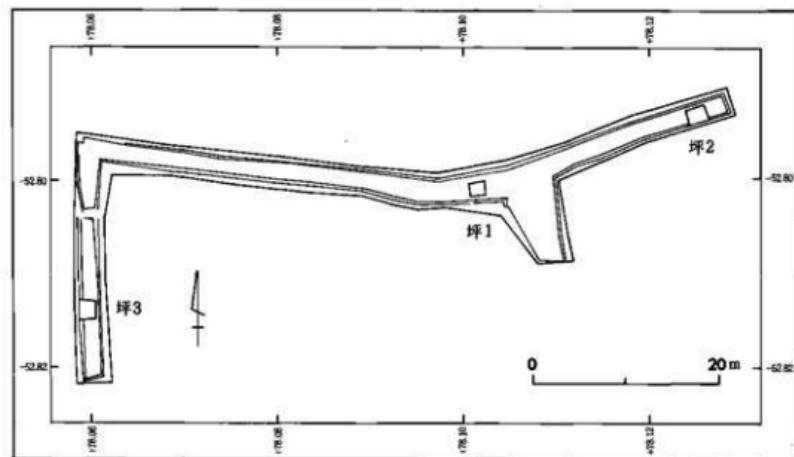


図5 東区調査区配置図

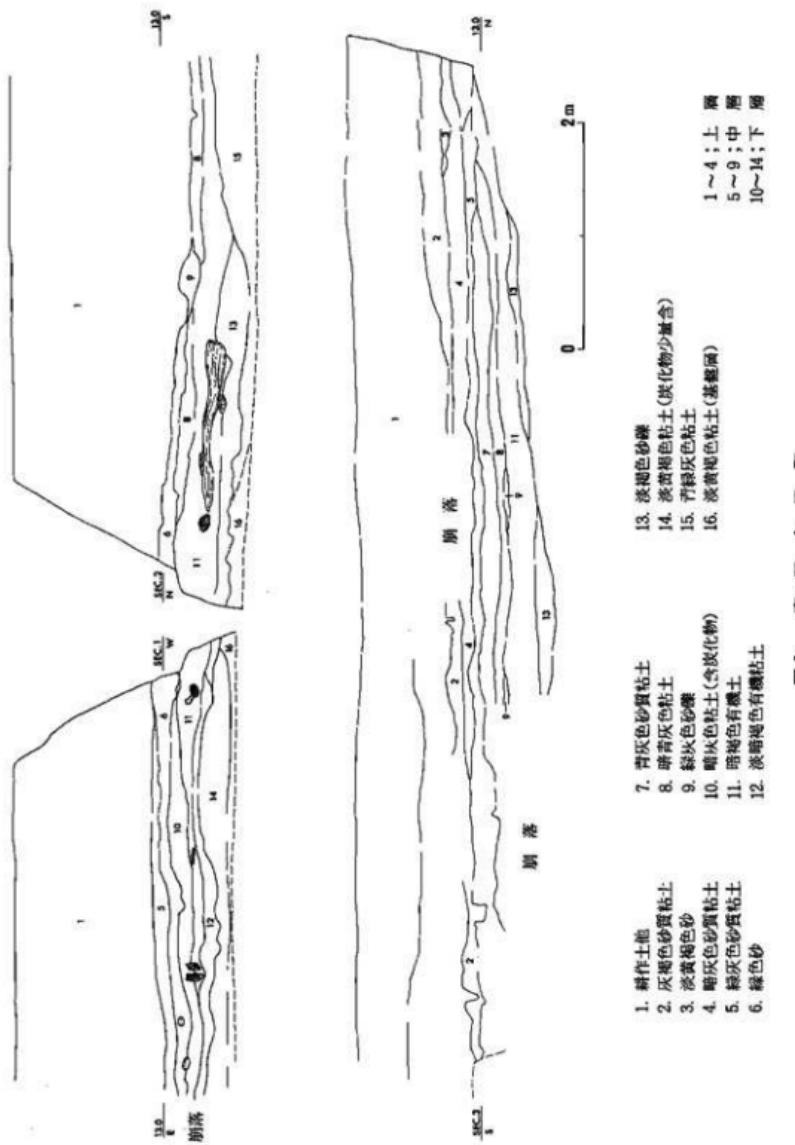


圖 6 東區土壤圖

この層よりも上層には、弥生時代前期から中期、一部縄文時代晚期の遺物を混えた土層が堆積している（中層）。さらにこの上層には、少量の弥生時代後期以降の遺物の包含がある（上層）。

遺構 調査区西方では、淡黄褐色土の基盤層が、旧地表から深さ約1.5mに存在し、この上面に堆積した土砂に、弥生時代前期から縄文時代晚期の遺物が包含されていた。調査区が鍵の手に折れまがる西端付近で、この基盤層は最も高く、この基盤層にSK01、02が掘り込まれている。また、西から東に流れていたと考えられるSD01も検出されている。この基盤層上面に堆積した10、暗灰色粘土から14、淡黄褐色粘土中の遺物を下層出土遺物として一括し、この上層に堆積する5、緑灰色粘土から9、緑灰色砂礫までを中層としてまとめた。ただし、精査以前に調査区壁沿いにめぐらせた排水用の溝からの出土遺物は、下層の遺物も含まれるが、中層出土遺物として一括した。4、暗灰色砂質粘土以上の出土遺物は、上層出土遺物として一括している。上層出土遺物は、弥生時代後期頃から中世の遺物が混在している。この上層遺物には、調査区西端に限らず、調査区全体の遺物を一括している。中層からは、弥生時代前期の削り出し突帯をもつ壺(1)などを最新の資料とし、これに突帯文系の遺物を混えている。下層出土遺物は、弥生時代前期の土器と、縄文時代晚期の突帯文系の遺物のみからなっており、この遺跡出土遺物中、最古の位置を占めている。

SK01、02は、調査区に北半のみがかかっており、南半は調査区外となり、未調査である。遺構内には、上部に12、淡暗褐色有機粘土が堆積し、その下に炭化物を少量含む14、淡黄褐色粘土が堆積していた。遺構は、基盤層に掘り込まれ、SK01、02の境は不分明であるが、SK01はさしわたり約3m、深さ0.4mを測る。SK02は、さしわたり約3m、深さ0.3mである。SK01では、上層の淡暗褐色有機粘土中に、弥生前期と、縄文晚期の遺物が混在している。この下の14、淡黄褐色粘土中には殆ど遺物は含まれなかった。SK02からの出土遺物はなかった。

SD01は、幅1.5mを測る溝で、最下層には、0.2mの厚さで13、淡褐色砂礫が堆積しているので、当初は水流のある水路であったものと考えられる。溝底の傾斜から、水は西から東へ流れていたものと考えられた。この水路を埋めた砂礫の上面には、植物質の纖維や流木の集まった暗褐色有機土が堆積しており、水路に水流がなくなったのちは、こうした植物が生い茂り、流木などが堆積する沼沢地となっていたものと考えられる。出土遺物の多くは、この暗褐色有機土中から出土しており、その出土状態から、沼沢地へこわれた土器などを廃棄したものと考えられる。土器の他にも、黒曜石剥片もかなりの量が出土している。

最下層出土遺物は、弥生土器と縄文土器が混在した状態で、両者を層位的に分類することは不可能であった。

出土遺物 中層出土遺物は、弥生時代前期のものを主とし、これに縄文時代晚期のものを混えている。(1)は、頸部に削り出し突帯を有する壺で、突带上に刻みを有し、胴部にヘラ描きの重弧文を



図7 東区遺構・遺物出土状態実測図

描いている。(2)もやはり削り出し突帯系のもので、外面を著しく磨いて仕上げる。(3)・(4)も同種の壺の口縁である。(5)は外面に綾杉状のヘラ描きの文様を施す小片である。(6)は、(2)と同様の壺肩部である。いずれの土器も径1~2mmの大粒の石英や長石を多量に含む胎土であり、黄褐色~赤褐色系の色調を呈する。(7~15)は甕である。口唇に刻みを有する(7~9)、口縁下にヘラ描き沈線を1本有する(8・10)、2本の沈線をもつ(11)がある。クシ状工具による多条の沈線を有する逆L字口縁の(13)、ヘラ描き沈線間に刺突文を有する(14)がある。(15)は筒状の胴部を有する甕である。(16)は口径約40cmの大形の壺あるいは甕である。甕には外面にスヌの付着したものが多いため。(17)は蓋、底部(18~37)は、外面をヘラミガキで仕上げたものと、ハケメを施したものがある。底部はいずれもしっかりしたつくりのものである。ほとんど黄褐色系の色調を呈するが、(24)のみは暗赤褐色を呈する。

(38~57)は、縄文時代晩期の突帯文系の土器である。これらの遺物は、胎土や暗褐色を呈する色調、断面で観察できる粘土紐の接合が内傾であることなどから、弥生時代前期の遺物とは比較的整然と分類しうる。しかし、(39・41・46・51・54・57)は、黄褐色~灰褐色を呈し、比較的明るい色調で、弥生土器のそれに近い。(38~50)は深鉢で、口唇下に突帯を貼り付ける(38~44)、口唇部に突帯を貼り付ける(45)、2条の突帯を貼り付ける(46)、口肩部を外方に折り曲げた形状を呈する(47~50)がある。また、器種不明の(51)、壺の可能性がある(52)、浅鉢と考えられる(53~55)がある。(53)は、口唇部に1条の沈線を、(54)は口唇下に2条の貼付突帯を有する。(55)は、波状口縁となる浅鉢と考えられ、口唇下と底部近くにそれぞれ1条の沈線を施す。器壁はかなり厚い。その他に、深鉢の底部(56・57)がある。

下層出土遺物のうち、(58~71)は弥生土器である。このうち(58~60)は甕で、(58)はかるく段のつく口縁部をもち、肩部に二枚貝の腹縁を連続して押し付けた3条の沈線と、やはり二枚貝による無軸の木葉文をもっている。この土器の外面および口縁内面は黒色を呈しており、漆などの塗布が考えられる。(59)は、段をもつやや大形の壺、(60)は2本の沈線を肩部にもつやや大形の壺と考えられる。(61)は、内外面を磨いて仕上げた蓋である。(62~66)は甕である。口縁下に沈線状の段をもつ(62)以外は、無段のものである。(64・66)は口唇部に刻み目をもつ。内外面をハケで仕上げるものが多いようである。(62)は外面にスヌの付着が厚く見られる。鉢(67)は、厚い底部から半球形の体部が続き、口唇端は内外に肥厚させて、上面に平坦面を作っている。内外面ともヘラミガキで丁寧に仕上げている。底部(68~71)は、いずれもごくわずかに上げ底となっており、図示したものは、外面にヘラミガキを施している。

(72~101)は、縄文時代晩期の突帯文系の土器である。中層出土の同様な土器と同じく、胎土や色調、調整の方法で弥生時代前期のものとは区別できるが、(79・81・84・85・88)は、灰褐色



図8 東区中層出土遺物実測図(1)

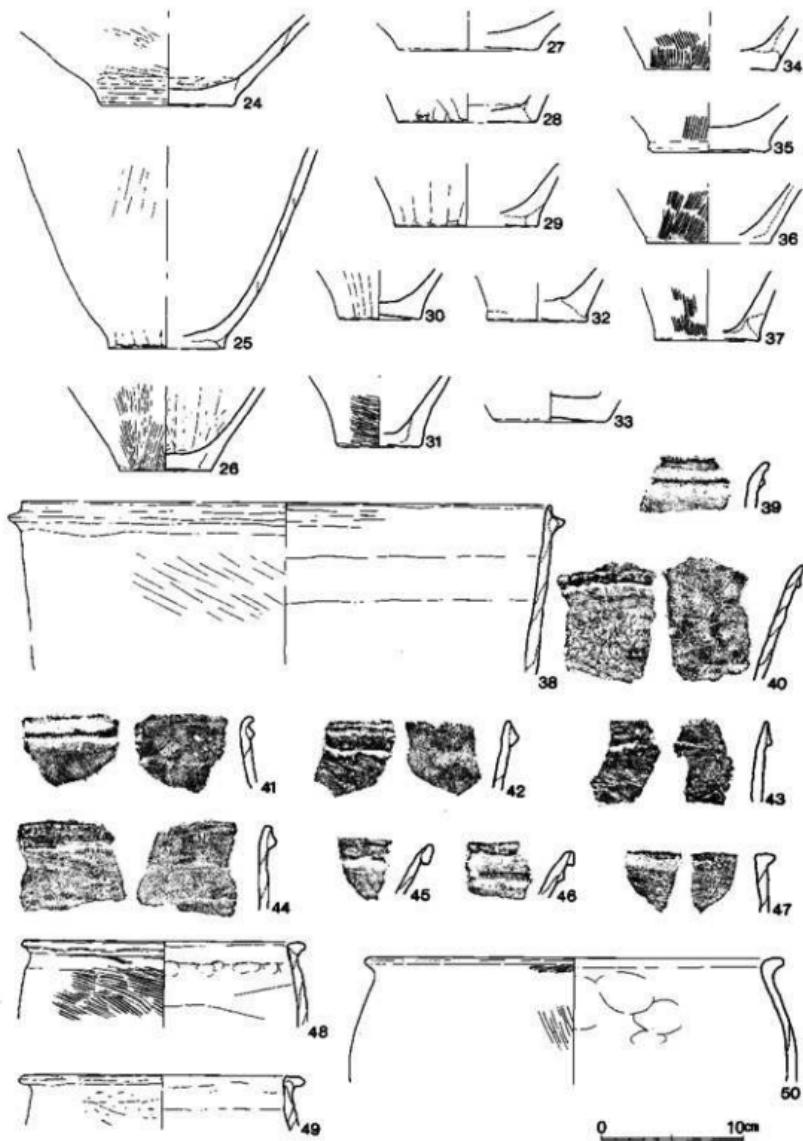


図9 東区中層出土遺物実測図(2)

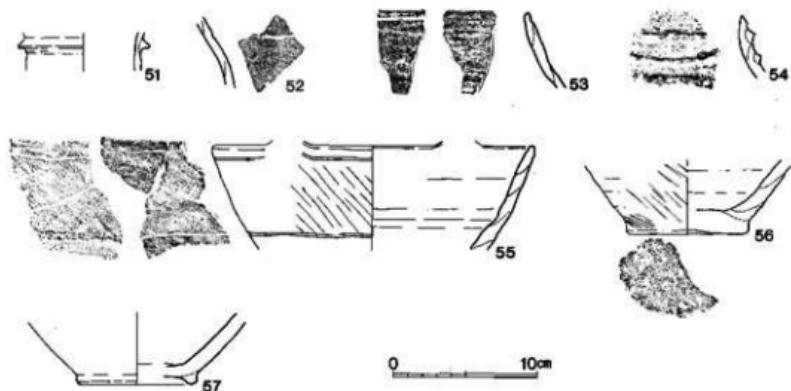


図10 東区中層出土遺物実測図(3)

系で、比較的明るい色調を呈する。深鉢（72～80）は、口縁下に貼付突帯を有する。（72）は外反する口縁下に細い粘土紐を貼り付けた突帯をもち、最大径が胴部下半にある。（73）はしっかりした突帯を有し、突带上にヘラ状の工具で切り込むナメの刻み目を有する。内外面とも板ナデで仕上げ、外面にはススが付着する。（76）はこれと同一個体である可能性がある。（74）は、大きく外反するやや小形の深鉢である。内外面とも貝殻腹縁によると考えられる条痕を深くとどめる。

（81・84・85）は、口唇部に直接粘土を貼り付けたもので、（84）は、これにヘラ状の工具で切り込んだ刻み目を施す。（85）は口唇部に貼った粘土紐の下端をひき出して突帯としている。（86・87）は、口唇下に突帯を貼り付けるが、これに接続させて、紐の短かい粘土紐を貼り付けて「T」字形の突帯としたものである。（88）は、やはり深鉢の胴部の破片と考えられるが、外面に少なくとも3条のヘラ描き沈線がある。深鉢胴部下半の（89）は、外面に二枚貝の腹縁による深い条痕をとどめている。内面には、一定線以下に炭化物が付着しており、煮沸中のものがこげついた痕跡であろう。（90～95）は、やはり深鉢の口縁部であるが、口縁端部に直接厚い突帯を貼り付けたもので、単に口縁端を折り曲げたもののように見える。しかし、その胎土は、暗褐色～黒褐色を呈する色調、板ナデを行う調整など、突帯文系の他の土器と変わることはない。（96～99）は、深鉢の底部と考えられる。かなり器形のわかる（96）では、円盤状の底部から屈曲して立ち上がる胴部につながる。外面は板ナデを施し、内面には粘土紐を積み上げた際の接合痕が凹凸となって観察できる。（97・99）も同様の底部であろう。（97）の底面には、土器製作の際に据えられた台の凹凸が残る。（98）は、強い火を受けたため、外面が剥落している。（100）は浅鉢の胴部と考えられる

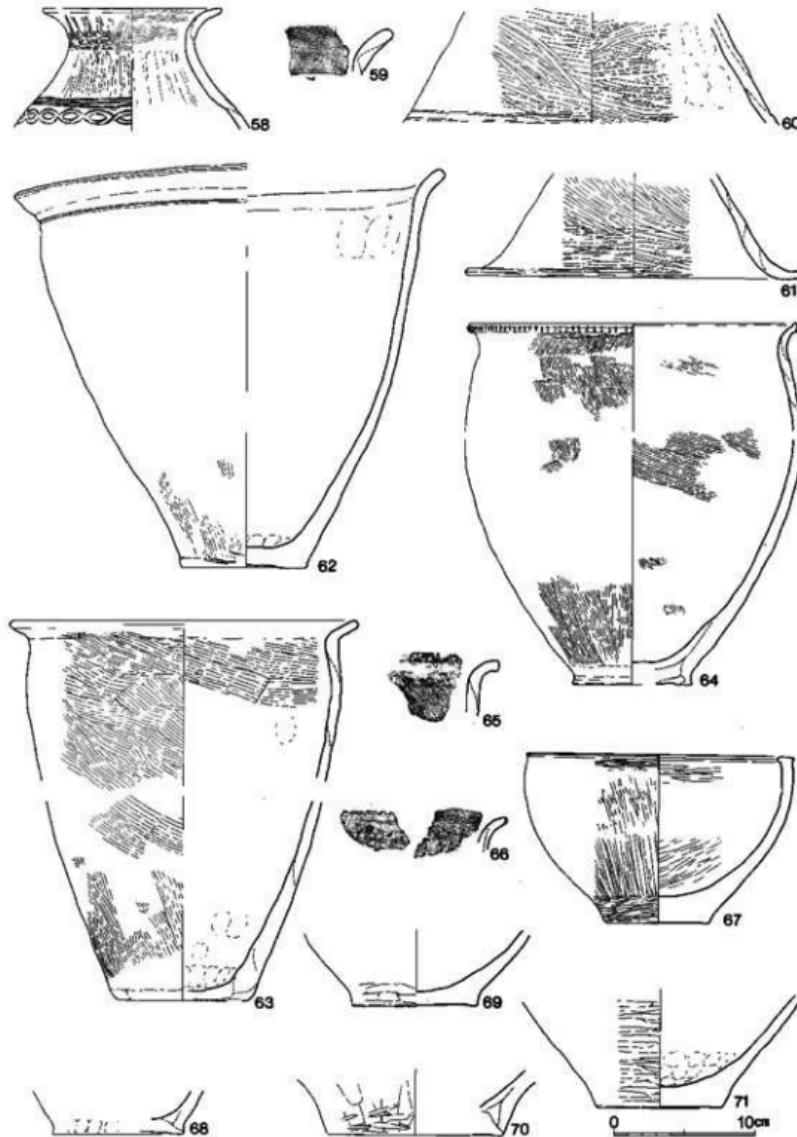


図11 東区下層出土遺物実測図(1)

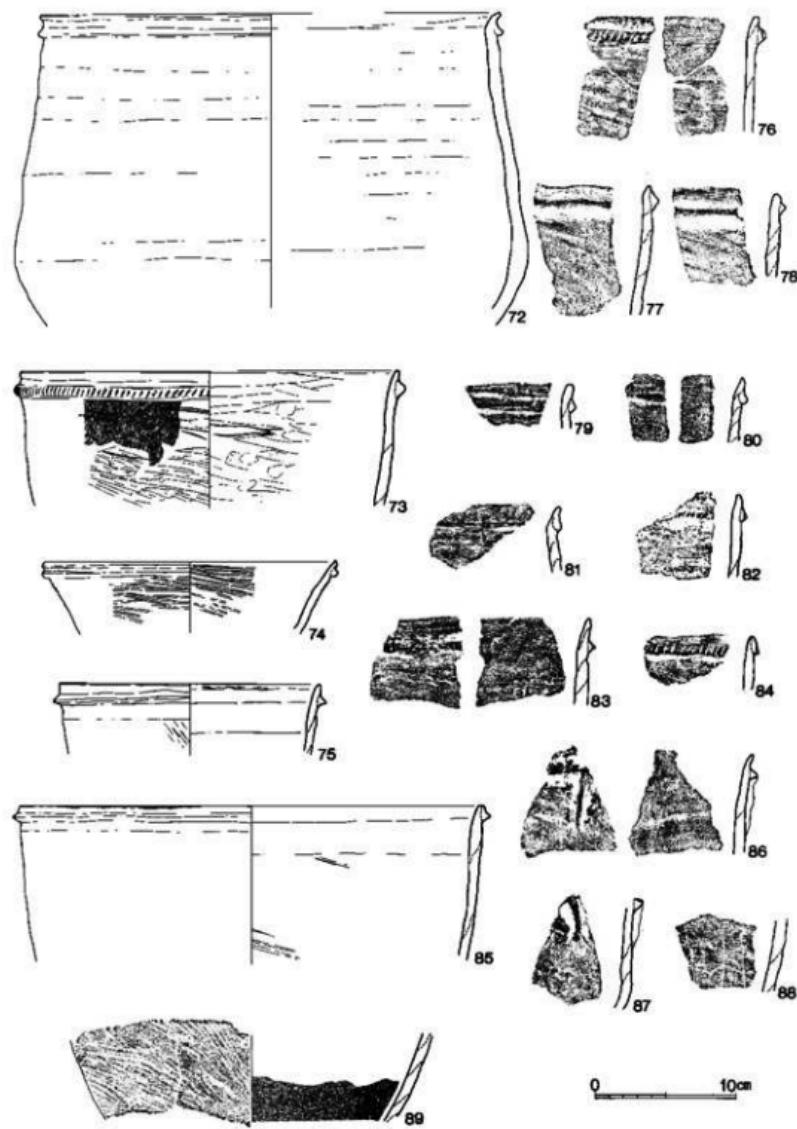


図 12 東区下層出土遺物実測図(2)

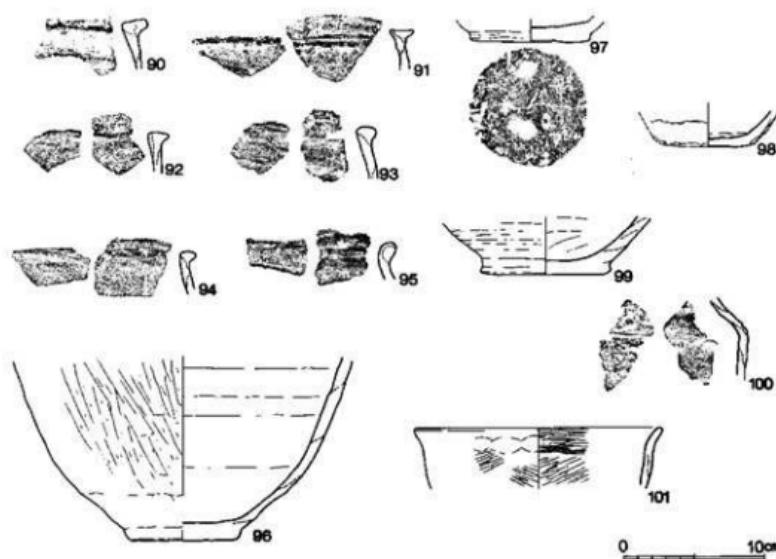


図13 東区下層出土遺物実測図(3)

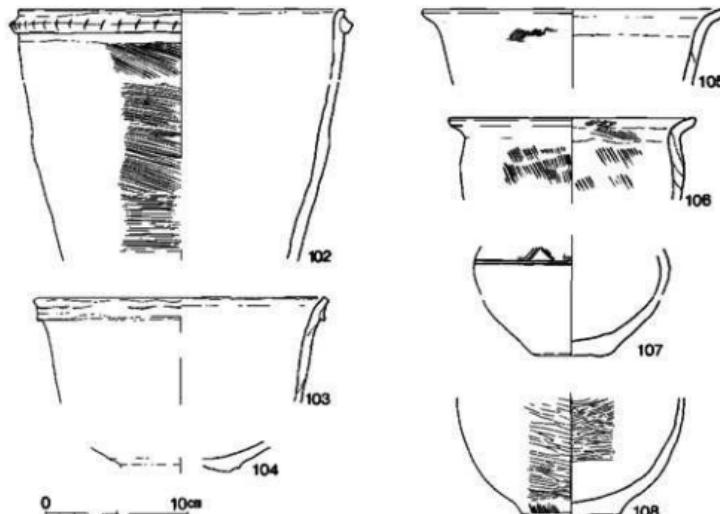


図14 試掘調査時出土遺物実測図

破片で、屈曲部に1条の沈線をとどめる。この個体も外面にススが付着している。(101)も浅鉢であろうか。内外面ともヘラミガキで仕上げ、黒褐色を呈する。

(102～108)は、昭和62年度の講武地区遺跡分布調査事業の第4調査区で出土した資料である。この地点は、今次調査の東区西端に位置している。同報告書図10(10)の弥生時代前期の甕は、今回の調査で出土した甕(62)と接合したため、割合した。これらの遺物は、今次の報告の中層下部と下層に相当するものと考えられる。(102・103)は、貼付突帯を有する縄文晚期の深鉢で、(102)は突帯上に細い刻みをもっており、胴部外面には横方向の条痕を有する。(104)は、底部だが、他のものとは異なり砂粒を比較的含まず、浅鉢などの底部と考えるべきかもしれない。(105～108)は、弥生前期の土器である。(105・106)は甕である。(106)は外面にハケの痕跡をとどめる。(107・108)は壺の胴部以下で、(107)には、無軸の木葉文が細いヘラ描き沈線で描かれている。(108)は、外面とも細かいヘラミガキで仕上げられる。

東区出土土器では、中層出土の弥生土器に削り出し突帯をもつもの(1・2)があり、これは弥生時代前期前半後葉と位置付けうるであろう。この層からは、逆L字口縁の多条沈線を施す甕(13)も出土しており、これは前期後半の後葉から中期初頭に位置付けうる資料である。このことから、この中層の時期は、弥生時代前期前半後葉から中期初頭を考えうる。ただ、弥生土器中には、(4・6)など段をもつ壺、口唇に刻みをもち、ゆるやかなカーブで折れ曲がる口縁の甕(7・8・9)などがあり、これは前代の遺物が混入したものである可能性がある。同様に、(38)以下の縄文晚期突帯文系の遺物も、前代のものの混入の可能性が強い。これらの遺物では、口唇下にしっかりと突帯を貼り付ける通有のものから、突帯を口唇部に直接貼り付けるもの、2条の貼付突帯を有するもの、口唇部に逆L字口縁風に貼り付けるものなどのやや退化したものの2相がみられる。

下層出土の弥生土器では、口縁部に段を有する壺、段を意識した甕などがあり、少なくとも削り出し突帯や多条沈線などの手法は見られず、前期前半代にさかのばらせうる資料といえる。この下層から出土した縄文晚期突帯文系の土器では、

中層資料と同様に、口唇下にしっかりと突帯を貼り付いたものと、口唇からかなり下がった位置に突帯を貼り付いたもの、口唇部に直接突帯を貼り付いたもの、口唇部に逆L字口縁風に貼り付けるものの2相が認められる。

下層からは、以上のように弥生前期と縄文晚期の土器が層位的には区別できない状態で出

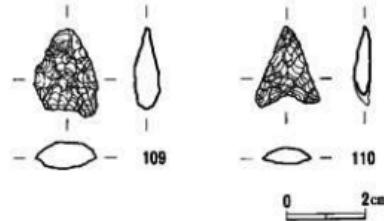
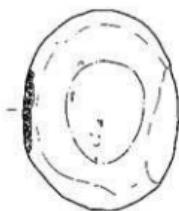
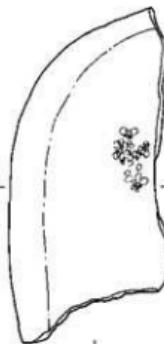
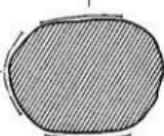


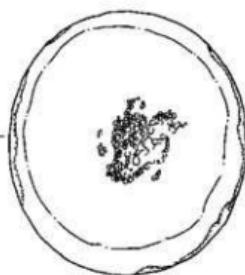
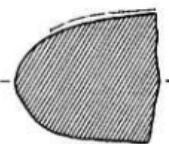
図15 東区出土石器実測図(1)



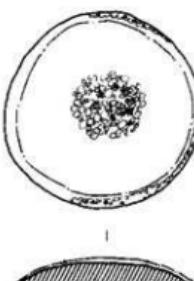
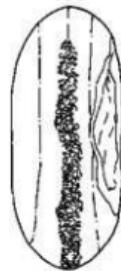
111



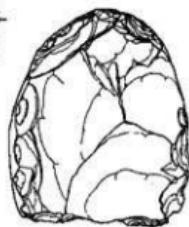
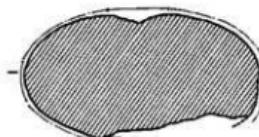
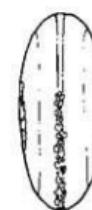
112



113



114



115

0

10cm

図16 東区出土石器実測図(2)

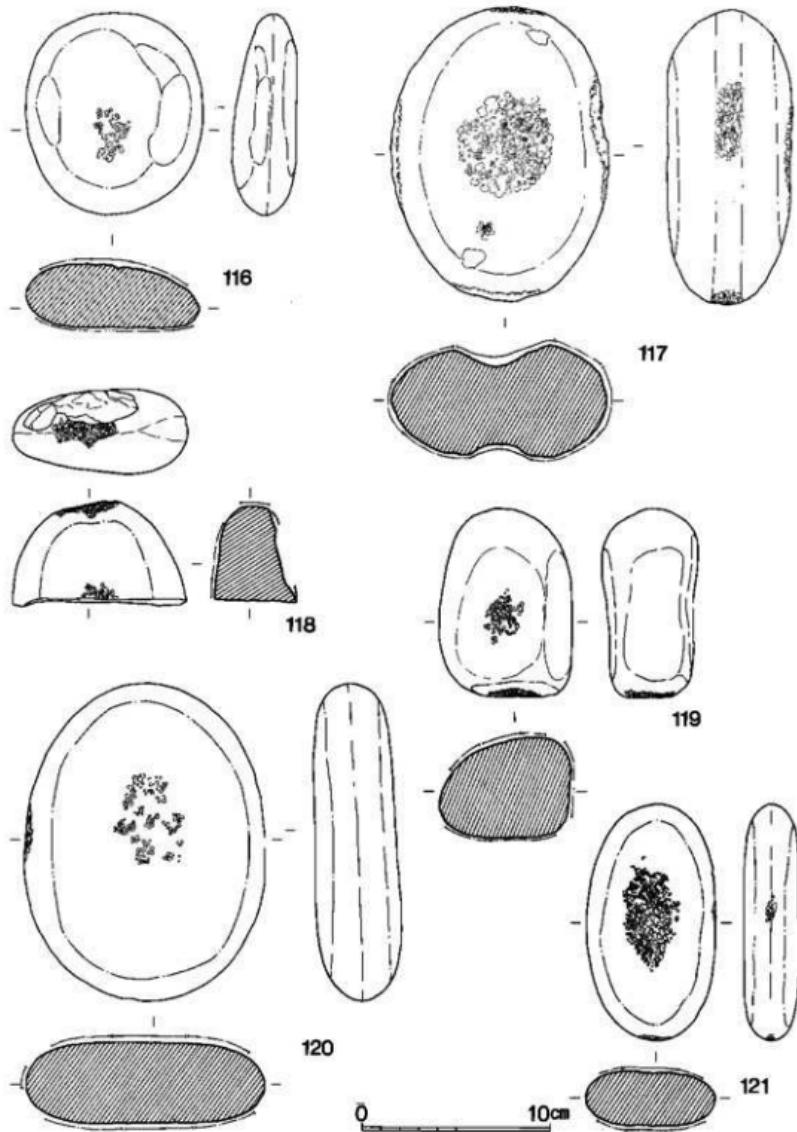


図17 東区出土石器実測図(3)

土している。しかし、その二者の間には、色調の似たものはあるものの、胎土、調整などの特徴で比較的容易に分類ができるので、両者の同時使用の可能性は、今後の類例を待って結論することとしたい。

(109、110)は下層出土の黒曜石鎌である。(109)は木製品の可能性がある。

凹石などの石器(111～121)のうち、(111、112、114)が下層出土、(113、115～117)が中層以下、これ以外は上層の出土である。

石皿の可能性がある(111)は、表面のみが使用のために磨耗している。また、1ヶ所に敲打痕がある。(112)は、表裏に磨耗があり、一側面に敲打痕をとどめている。やや大形の凹石(113)は、表裏に磨耗があり、観察できる表面中央と、側面に敲打痕がある。表面の敲打痕はくぼみになっている。(114)は、表裏に磨耗と敲打痕、側面にも敲打痕がある。(115)は、表面に敲打痕があるが、一端を大きく打ち欠いて刃部をつくり出している。刃部の反対側では刃つぶしをおこなって握りやすくしている。(116)は表面にのみ敲打痕をとどめ、表裏に磨耗がある。(117)は表裏に著しい敲打痕と磨耗があり、側面でも敲打をおこなったことがわかる。(118)も同様の石器の破損品である。(119)は蔽石で、握って使用したと思われ、円柱状の一端面に敲打痕がある。側面にも磨耗と打痕がある。(120)は、偏平な石材で、表裏に敲打痕と磨耗の痕跡をとどめる。(121)は棒状の凹石であるが、蔽石としても使用した打痕が一端にある。

(122)は田下駄で、長辺32cm、短辺26cmを測る。厚さは

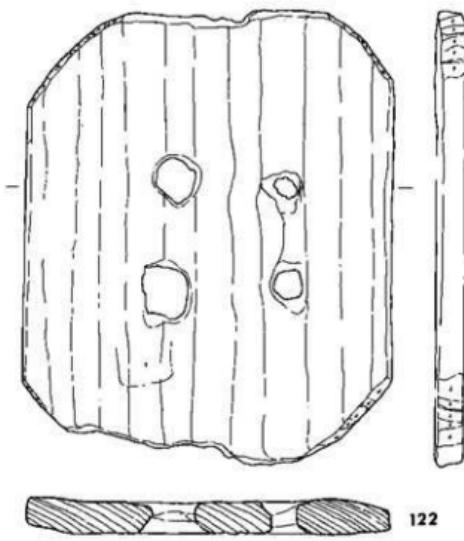


図18 東区出土田下駄実測図

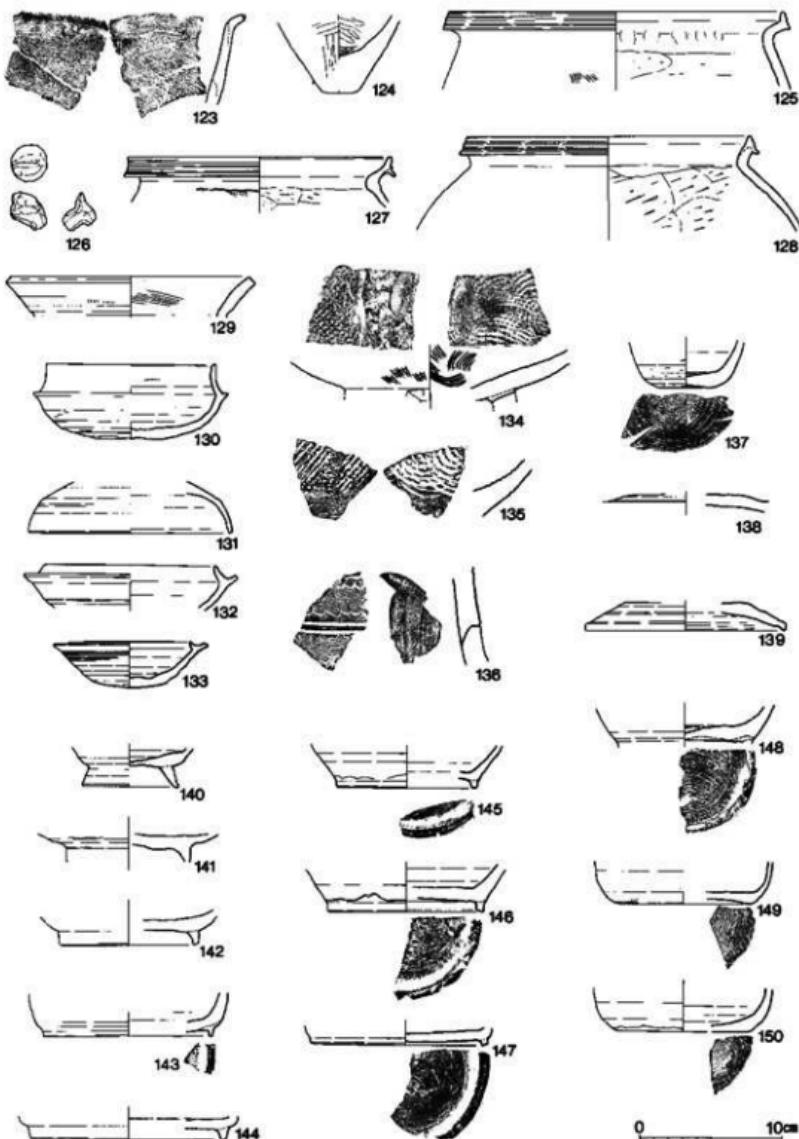


図19 東区上層出土遺物実測図(1)(123のみは坪3出土)

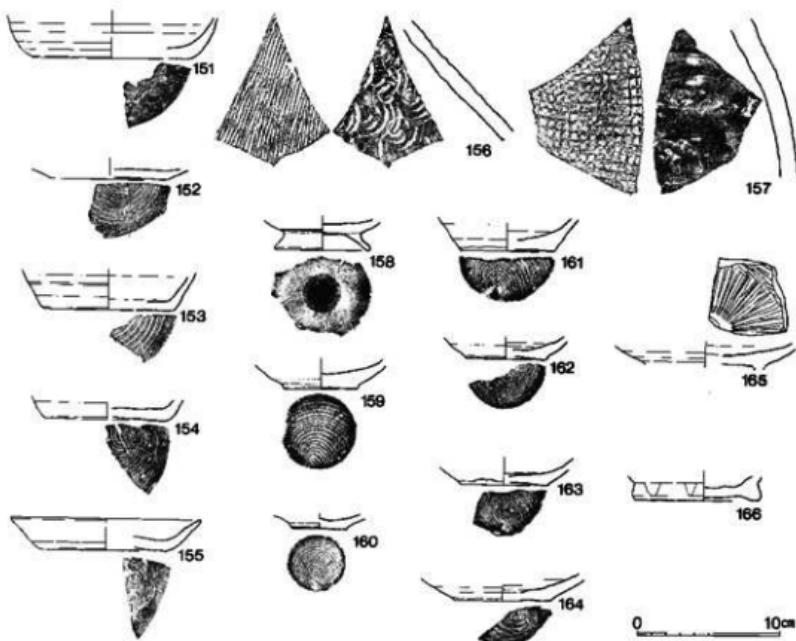


図20 東区上層出土遺物実測図(2)

2cmである。中央部に4穴が穿たれており、四隅は斧状のもので削って角をおとした刃のあとが残っている。上層に相当する土層からの出土である。

(123)は坪3からの出土遺物で、弥生時代前期の壺である。口縁端部に刻み目を施し、内外面をハケで仕上げている。

(124)以下は、上層からの出土遺物である。(124)は器種不明の底部で、内外面を磨くこと、大粒の砂粒を含むことから、弥生時代前期のものの可能性がある。(125、127、128)は弥生時代後期前半の壺で、上下に拡張した口縁部に3本の凹線を描いている。(126)は時期不明の手づくねの土製品である。土鉢のようなものであろうか。(129～137)は古墳時代の遺物である。(129)は単純口縁の土師器壺で、古墳時代前期のものであろう。(130～133)は須恵器蓋杯類である。(134～136)は、須恵器脚付壺片である。(134)は、球形を呈する親壺の底部から脚部にかけての破片である。脚には方形の透しが穿たれている。内外面とも淡緑色の自然釉がかかっている。(135)もこれに近い部分の破片と考えられるが、自然釉は全くかかっていない。(136)は、脚部の破片で、外面には

2条の沈線を施したX画があり、この間をクシ状の工具による波状文で埋めており、ここに三角形の透しがある。これら須恵器脚付壺は、調査区上に位置する向山古墳、雄ヶ崎荒神古墳に立て並べられたものが転落したものであろう。(136)は、向山古墳出土のものに近い(図2参照)。しかし、(134)は向山古墳出土のものとは大きく趣を異にし、別系統のものである可能性が強い。(137)は壺の底部と考えられる。(138)は、縁釉陶器の破片と考えられ、薄く淡緑色の釉がかかっている。(139～155)は古墳時代以降の須恵器である。(139)は宝珠つまみをもつと考えられる蓋、(140～148)は高台を有する杯である。(140)は小ぶりながらも、しっかりとふんばる高台を有する。(145～148)は底部に回転糸切りの痕跡をとどめている。(149～155)は、高台をもたない杯である。その殆どが回転糸切りの痕跡をとどめるが、皿状の(155)のみは、ヘラでおこしたような痕跡を残している。

(156・157)は、中世須恵器の壺片である。(156)は細い平行線状のタタキをもち、比較的よく焼きしまっている。(157)は、外面に粗い格子状のタタキが残り、内面は丁寧にナデて仕上げている。灰白色を呈し、軟質な焼き上がりである。

(158～165)は土師質土器である。(158・165)以外は高台をもたない。いずれも底部に糸切り痕をとどめる。(165)は高台を有する杯であるが、内面底部には放射状のヘラミガキを施し、その外側を横方向のミガキで仕上げている。内面は内黒となっている。(165)は青磁である。うすい淡緑色の釉がかかっている。

2. 西 区

西区は、東区から農道を挟んだ西側に設定した南北15m、東西12mの調査区である。調査前は標高14m前後の水田であった。この調査地の北東に隣接して向山丘陵があり、この丘陵の裾が調査区内でも西に向って下降していき、それに主として洪水による砂礫と粘質土が堆積して現在の水田面に至っている。また、この調査区南方にトレンチ3ヶ所を設定し、遺構の広がりを確認しようとしたが、3ヶ所とも上層から須恵器片が出土したことなどより、遺構は確認できなかった（トレンチ2・4・5）。トレンチ2・4では、それぞれ下層から流木が検出されている。

調査区土層をみると、南北セクションで上層が水平に堆積しているのは、水田層とその上面に被った砂礫層のためである。南端に近く水田畦畔が上下2層にわたって認められた。東西セクションでは、向山丘陵からの基盤層の傾斜に直交する土層となっているため、この傾斜に沿って走る水路がそれぞれ横断面を見せる。古代から中世にかけてのSD01にはじまり、最下層の弥生時代前期のSK01まで、各時代の遺構が順次層序を低くしながら検出されている。

西区の上層で検出された遺構は、調査区東方のSD01、02、03および、西方の水田である。

SD01 この溝は、調査区西方で耕作土を除去した段階ですでに現われた向山丘陵からの基盤層に掘り込まれた溝である。長さ約12mにわたって検出し、検出面での幅は3~2m、深さは約0.3mである。後世、丘陵裾を水田とするための削平により上半が削られたものと考えられる。溝内には、砂質粘土および砂礫が堆積しており、この覆土中には古墳時代後期から中世までの遺物が含まれ、最終的には中世の洪水によって埋没したものと考えられる。出土遺物や周辺の状況から、後述する中世および古代の水田には、この水路から給水していたものと考えられる。SD01以下の水路も、丘陵裾部のそれぞれ当時の比較的高所に設けられた水路と考えられ、その下段に位置した水田に給水していたものと考えられる。

SD02 この溝は、SD01にはほぼ平行し、溝底で0.3m低い。溝の東側は地山の岩盤を掘削し、西側では盛土を行っている。この盛土部分には杭を打ち込んで補強している。杭には径10cm内外の太い丸太杭が使用されている。幅は1.3m前後、深さは約0.4mである。この

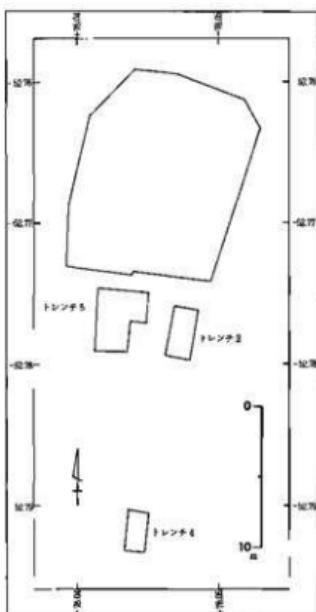


図21 西区調査区配置図

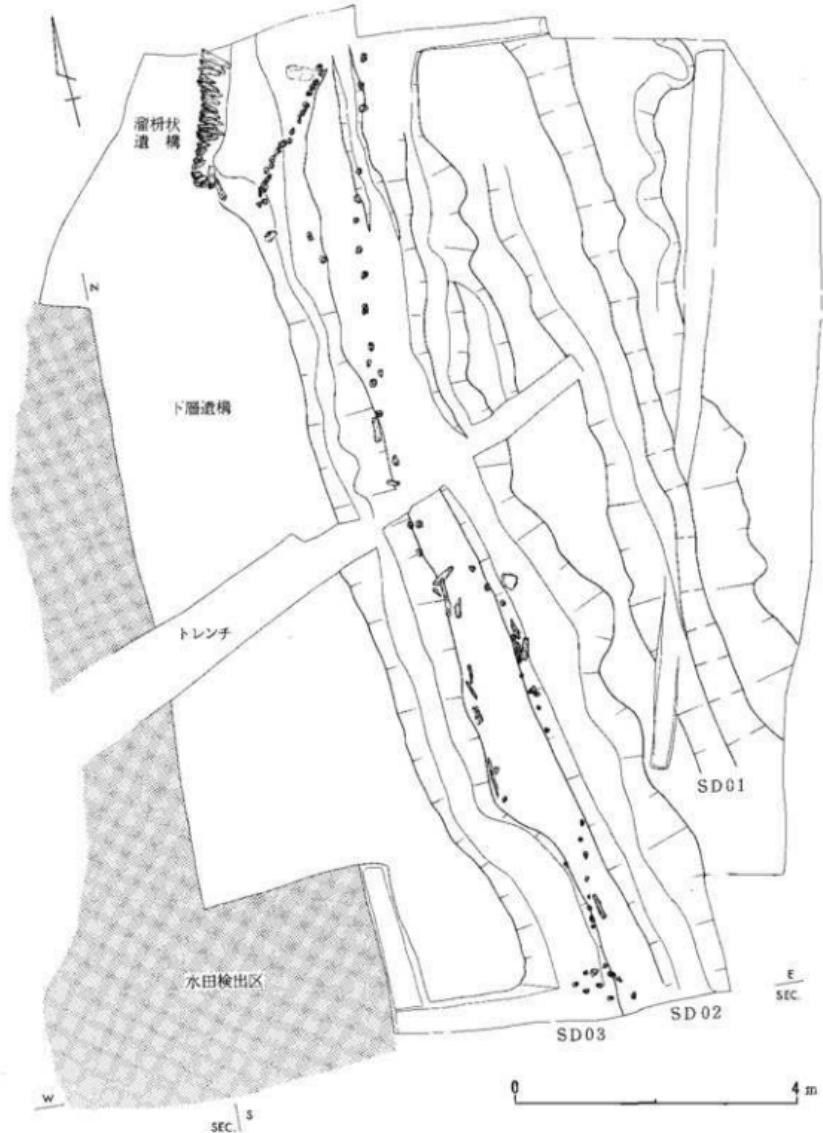
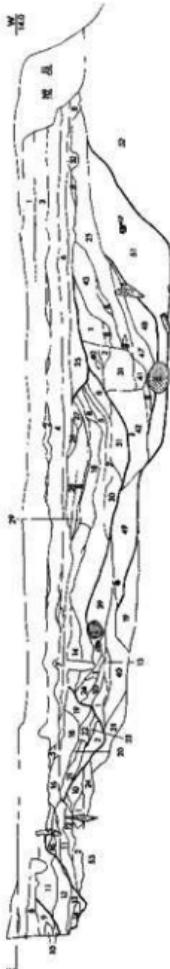
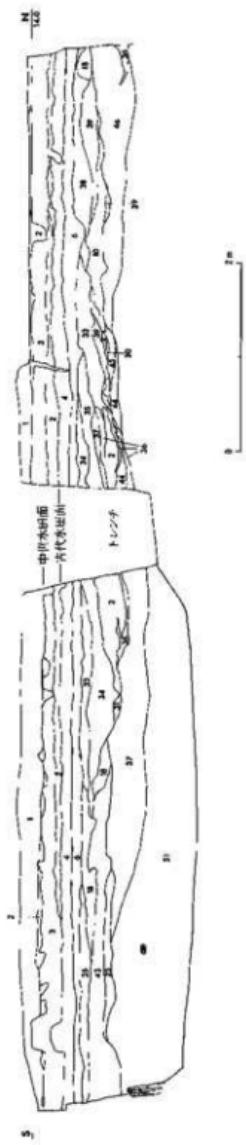


図22 西区上層遺構実測図



- | | | | |
|-----------------|--------------|---------------------|--------------|
| 1. 喀灰色粘土 | 15. 深褐色粘土 | 29. 深褐色有腐土 | 43. 深灰褐色粗砂 |
| 2. 黄褐色沙壤 | 16. 淡茶褐色砂质粘土 | 30. 灰褐色粘质砂 | 44. 茶褐色砂壤 |
| 3. 斑茶灰褐色土(中世水田) | 17. 暗茶褐色砂质粘土 | 31. 淡灰褐色砂质粘土 | 45. 淡灰褐色砂质粘土 |
| 4. 喀灰褐色土(古代水田) | 18. 淡茶褐色砂 | 32. 棕褐色 | 46. 棕色壤 |
| 5. 喀灰褐色粘土 | 19. 深褐色砂壤 | 33. 淡青灰褐色砂质粘土(含有植物) | 47. 鹅灰色砂质粘土 |
| 6. 暗绿色砂 | 20. 暗灰褐色砂质粘土 | 34. 淡青灰褐色砂质粘土(含有植物) | 48. 淡绿灰褐色粘土 |
| 7. 斑褐色土 | 21. 暗灰褐色粘土 | 35. 淡褐色砂质粘土 | 49. 茶褐色砂壤 |
| 8. 淡黄褐色砂 | 22. 淡茶褐色粗砂 | 36. 淡褐色有腐物 | 50. 灰白色粘土 |
| 9. 喀灰褐色砂质粘土 | 23. 暗灰褐色粘质砂 | 37. 斑褐色砂(含有植物) | 51. 暗青灰褐色砂 |
| 10. 褐色砂 | 24. 暗常褐色砂壤 | 38. 青灰色砂质粘土 | 52. 青色粘土 |
| 11. 灰褐色砂质粘土 | 25. 淡黄灰褐色砂 | 39. 淡褐色砂质粘土 | 53. 鹅灰白色粘土 |
| 12. 喀灰褐色砂质粘土 | 26. 淡灰褐色粘土 | 40. 淡灰褐色砂 | |
| 13. 喀灰褐色砂 | 27. 淡灰褐色粘土 | 41. 淡灰褐色粗砂 | |
| 14. 喀灰褐色粘土 | 28. 淡茶褐色粗砂 | 42. 淡灰褐色粘土 | |

图23 西区土壤图

溝内からは、古墳時代前期の土器が出土している(図30)。このうち、(199)は山陽地方でみられる壺の口縁部である。また、1片ではあるが、磨消繩文のある繩文時代後期の土器片もあった。この盆地内にこうした時代の遺跡が存在することは今後注意を要するだろう。

S D 0 3 この溝は、S D 0 2 に平行し、溝底で約0.2m低い。長さ約15mにわたって検出した。幅は1m前後、深さは0.4mである。この溝の北端には、丸太材をみかん割りに4~6分割した長さ60~70cmの杭を23本、密接させて打ち込んだ溜柵状の遺構が残存していた(図29)。この部分で溝は幅が広く、かつ深くなっている。付近に存在した本水路から取水した水を一時的に貯えるなどの目的をもって作られたものと考えられる。この遺構の東側から溝底にかけては基盤層で、盛土をする西側では、しがらみ状に木材を埋め込んだ上に杭を打ち込んでおり、かなりの水量のあるためか強化した構造である。また、この溝の調査区南端には、溝を横断するように杭が打ち込まれており、これらの杭がこの溝に伴うものとすれば、この部分に樋状の施設があったものと考えられる。この溝からは、弥生時代後期前葉から後葉にかけての遺物が出土している(図31)。(202)は小さな平底をもつ小形の壺で、小さく折り返した口縁部をもつ。体部外面はかすかにハケの痕跡をとどめ、内面はヘラケズリののちになでている。(203・204)は、上下に拡張した口縁部に凹線を施した壺、(205)は、上下に拡張した口縁部にクシ状の工具による平行沈線を施したものである。

(167~180)は、西区の耕作土中、(181~191)はS D 0 1からの出土遺物である。

(167)は、須恵器脚付壺の脚部で、1条ずつの沈線を施した区画があり、この間を波状文で埋めている。また、三角形と考えられる透しがある。東区出土の(136)や、向山古墳例に類似する資料である。(168~172)は高台を有する須恵器杯である。(173)は須恵質の陶瓶である。復元径約15cmを測る。高台を有し、外面に1条の突帯がめぐっている。海に相当する部分は内湾しながら立ち上がりて陸へ続くと考えられる。(174~176)は高台をもたない須恵器杯である。(177)は須恵器壺の底部である。高台を有し、外面には別個体が窓着している。(178)は須恵器大壺の口縁部、(179)は中世須恵器の壺片で、外面に粗い格子状のタタキの痕跡をとどめる。東区出土の(157)に類似する資料である。(180)は、青磁碗の底部である。見込みに陰刻の文字を有する。

S D 0 1 出土資料には、古墳時代以降の遺物が含まれている。(181)は須恵質の埴輪で、円形の透しがある。外面にはヨコハケ、内面には底部調整の際の押圧痕が残っている。向山古墳出土の埴輪に類似のものがある。¹⁵(182)は須恵器脚付壺である。壺と脚部の接合部に相当する破片である。外面にはタテ方向の強いナデが施され、内面には壺の部分に同心円状のタタキ痕、脚との接合部には接合の際の圧痕をとどめる。壺は当初から底のないものを脚と接合したものと考えられる。青灰色を呈する。外面に残る手法は、やはり向山古墳のそれに類似する。埴輪、脚付壺とともに丘陵上の

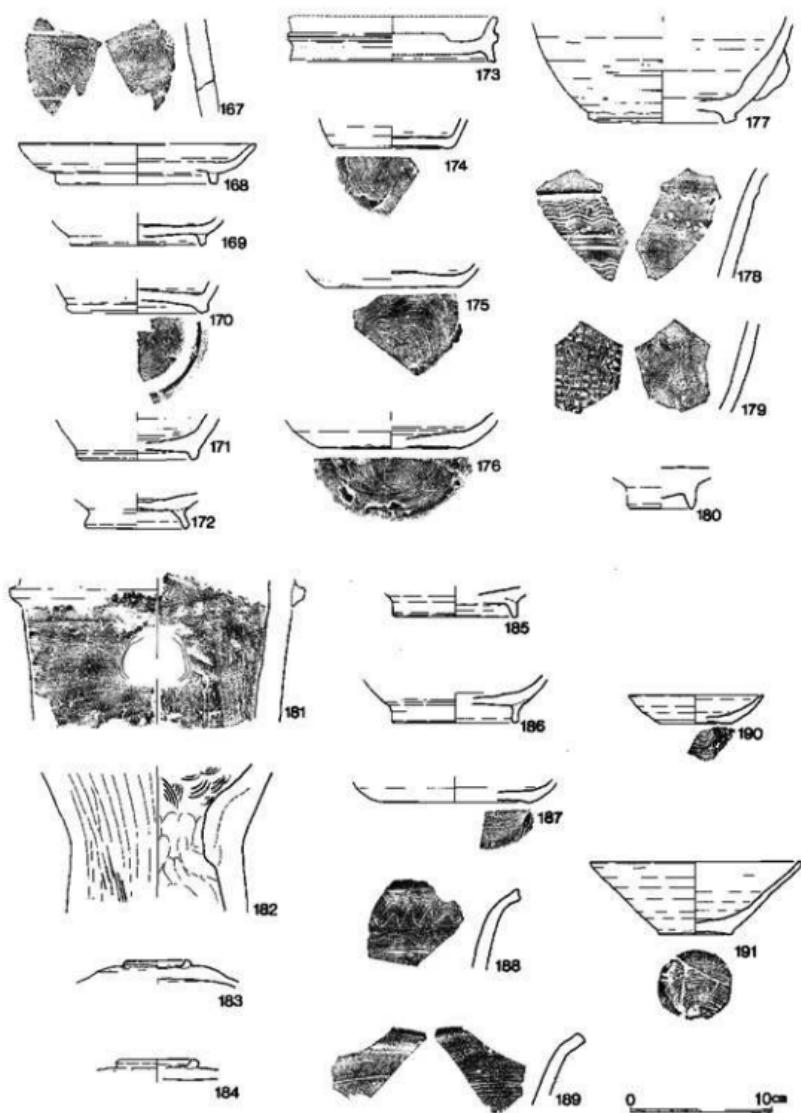


図24 西区出土遺物実測図（167～180；耕作土中、181～191；SD 01）

古墳から転落したものと考えられる。(183・184)は輪状つまみをもつ須恵器蓋、(185～187)は須恵器杯である。(187)は高台をもたず、底部に回転糸切り痕をとどめる。(188・189)は須恵質の甕口縁である。(188)は外面にヘラ描きの雑な波状文を描く。(190・191)は土師質土器の杯で、両者とも底部に回転糸切り痕をとどめる。(191)は口縁部に黒斑がある。この遺物が、この溝内の最も新しい時代の資料であり、この古代末から中世の遺物をもって、この水路の廃絶の時代と考えたい。

中世水田 調査区南内隅でわずかな面積ではあるが、水田を確認した。水田面には厚さ5cm前後の洪水によると考えられる砂礫が被っており、これを除去することによって検出できた。水田面には、東西にはしる幅50～30cm、高さ10cmの畦畔が残存していた。水田面は畦畔の北側で標高13.9m、南側ではこれより2～3cm低くなっている。この面には砂礫が流れ込んだ状態で約100個の足跡が残存していた。足跡には不整形なものも多いが、明瞭なものでは長さ22～24m前後と14～15cmのものがあり、小さいものは子供のものである可能性が考えられた。

(192・193)は、この中世水田面からの出土である。(192)は土師質土器杯で、底部に回転糸切り痕をとどめる。(193)は須恵器甕片であるが軟質な焼き上がりで、中世須恵器と考えられる。これらの遺物から、この水田面は中世初頭に埋没したものと考えられる。

古代水田 中世水田の下層に存在した。やはり上面に洪水砂礫が薄く被っており検出できた。水田面にはやはり東西に、幅35～10cm、高さ約10cmの畦畔が残っており、上面の水田と畦畔の位置が一致しており、水田区画の継承という点で注目される。この畦畔には、



図25 中世水田面実測図

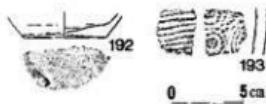


図26 中世水田面出土遺物実測図

途中低くなるところがあり、水口と考えられた。この畦畔から枝分れする小畦畔もある。この水田面でも足跡が残っている。ここで検出した畦畔は、ほぼ東西南北にそろっており、条里に沿うものである可能性がある。

(194～196)は、この水田面からの出土遺物である。(194)は輪状つまみのつく須恵器蓋、(195)は宝珠つまみの須恵器蓋であるが、内面天井部に墨痕をとどめ、硯に転用されていた。(196)は高台のつく須恵器杯底部である。底部には回転糸切り

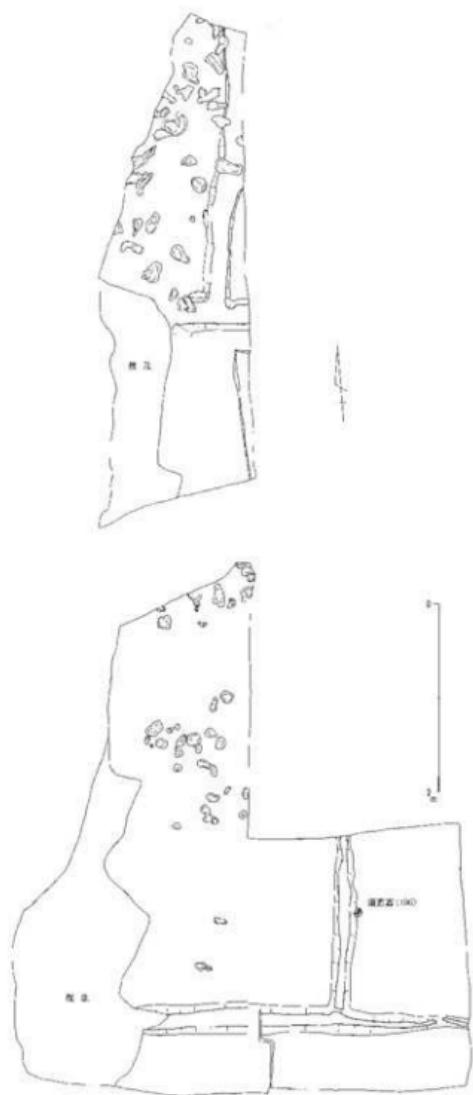


図27 古代水田面実測図

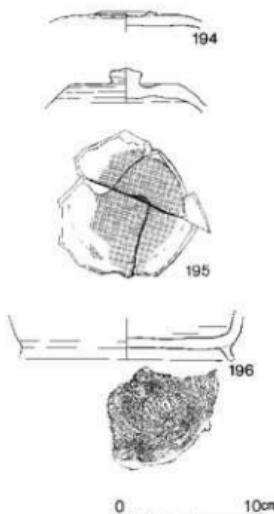


図28 古代水田面出土遺物実測図

痕をとどめる。これらの
遺物は、出雲國庁編年第
3形式、柳浦編年の第3
~4式に相当し、奈良時
代のものと考えられる。

SD 04 ほぼ南北に
のびていた水路で、長さ
約10mにわたって検出し
た。南方では分岐する。
この水路の北半では、溝
底は基盤層となっており、
この面には溝掘削時の工
具痕が残っていた。明瞭
に残る痕跡では、工具刃
先は幅11cmである。かな
り鋭く基盤層に打ち込ま
れており、鉄製の刃先を
装着した鍛ないし鎌と考
えられる。一方、南半で
は、溝は粘質土に掘り込

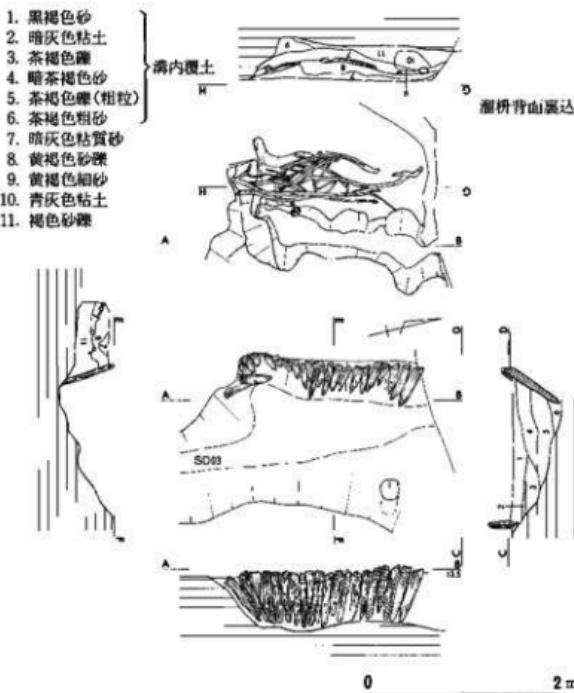


図29 SD 03 潜橋状遺構実測図

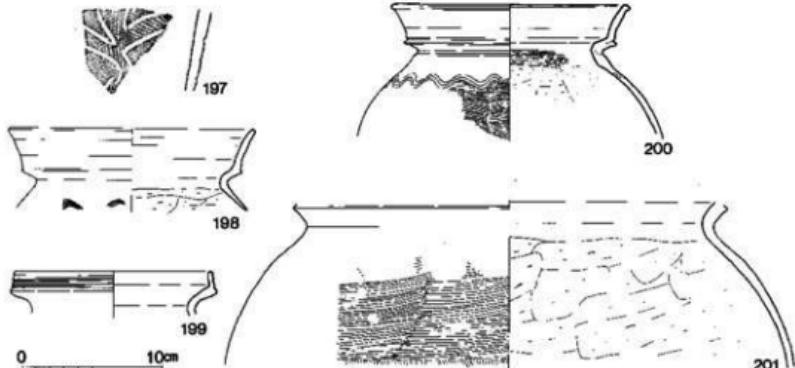


図30 SD 02 出土遺物実測図

まれているため、不整形な凹凸が残っている。明瞭なものはないが、これは溝底を歩いた人間の足跡と考えられた。この面には複数の水路が切り合って存在するものと考えられるが、その覆土からはさほど時期を異にするものとは考えられない。(206)は、

1. 淡茶褐色粗砂
2. 淡茶褐色粘質砂

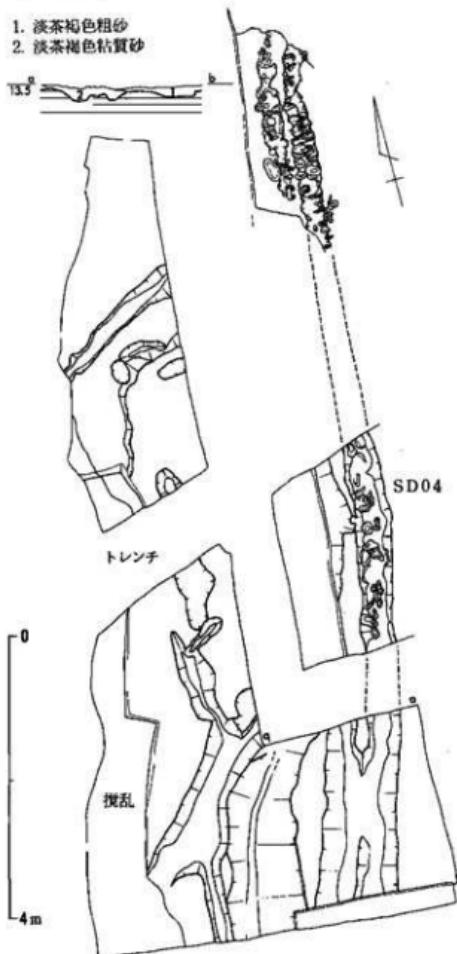
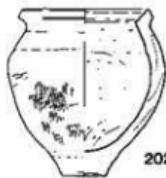
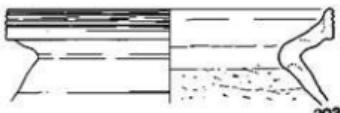


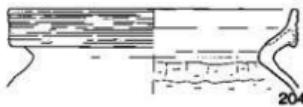
図32 SD 04 実測図



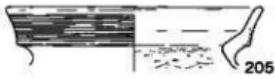
202



203



204



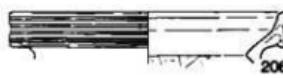
205

0 10cm

図31 SD 03 出土遺物実測図

この造構面出土上の壁で、上方にくり上げた口縁部には5条の印線を描いている。弥生時代後期中葉のものである。

SD 05 SD 03 の下層に存在した水路である。調査区南半でのみ、長さ 6.5 m を検出した。幅は 1 m 前後である。SD 03 より溝底で 0.3 m 低い。溝は途中で屈曲し、この部分に長さ 2 m の棒状の板を横たえ、この前後に杭



206

0 10cm

図33 SD 04 出土遺物実測図

を打ち込んだ堰状の遺構が検出されている。これに隣接して田下駄の半折品が1点出土した(207)。堰状遺構(図35)は、幅1.5m、深さ0.2mの水路上面に、2.1mの横木を架けたし、その前後に杭を深く打ち込んで固定していた。水路の屈曲した部分に設けられたもので、この水路の下流(南方)の水路への流水の調節をおこなったものと考えられる。検出面では水路は浅いものであったが、南壁土層ではこのSD05はかなりの幅と深さがあるので、この堰は溝底近くにあって、流水はこの横木を越えて流れていたものと考えられる。

SD06 SD05とSD07に挟まれるように検出された水路である。長さ10mを検出した。

幅は0.5~1.2mである。SD05によって切られており、SD05よりも前代のものである。

SD07 調査区を斜めに横切るような格好で検出した。長さ10m余り、幅は北方では狭く、分岐している。SD03よりも溝底で0.5m低い。北半は基盤層に、南半は砂礫層中に掘り込まれている。砂礫層に掘り込まれた部分では、地盤が弱いためか、多くの杭が打ち込まれていた。この溝内には、砂礫が堆積し、木柱が多数含まれていた。溝中からは、弥生時代前期後半前葉と考

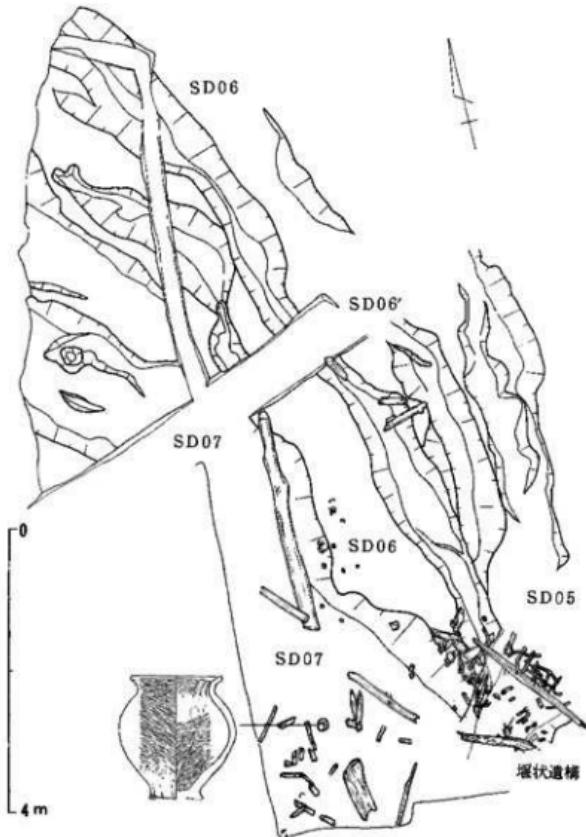


図34 西区下層遺構実測図 (SD05~07)

えられる遺物が出土している。

SK 01 SD 07 の下層に存在した大形の土坑で、検出したさわわたしは 5.5 m、幅は 3.5 m である。西区ではこの遺構が最下層に存在したことになる。土坑底は標高 12.4 m である。土坑肩の残存する西側の岸からは深さ 0.9 m を測る。坑内には、暗青灰色砂礫が充満しており、流木も含まれていた。基盤ながら軟弱な地盤の西側では、岸に杭が打ち込まれていた。この大形の土坑の性格は明らかにすることができなかった。土坑内からは弥生時代前期の遺物が出土している。

(207) は SD 05 出土の田下駄半折品で、長さ 33cm を測る。厚さは 1.2 cm と比較的薄い。

穿たれていたと考えられる 4 孔のうち、2 孔が残存しており、孔間には 7 cm の間隔がある。隅は角をおとして丸味をもたせている。

(208 ~ 210) は SD 07 からの出土、(211 ~ 214) は SK 01 からの出土である。

(208) は腰羽部の破片で、外面を縱方向のハケで仕上げたのち、4 条以上のヘラ描き沈線を描く。

(209) は蓋と考えられ、端部に 1 条の沈線を施す。(210) は、しっかりした底部をもつ小ぶりの壺で、短かく外反させる口縁部をもつ。

内外面とも著しく磨いて仕上げる。SD 07 は、以上の出土遺物から、弥生時代前期後半前葉と考えておきたい。

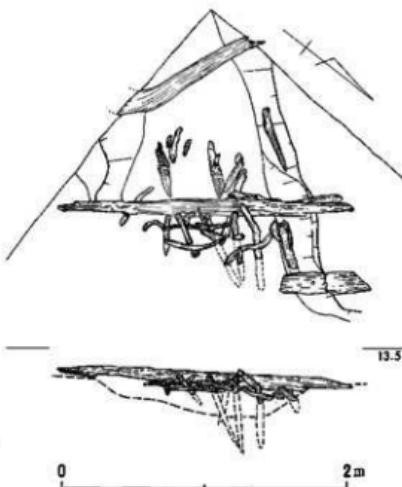


図 35 SD 05 墓状遺構実測図

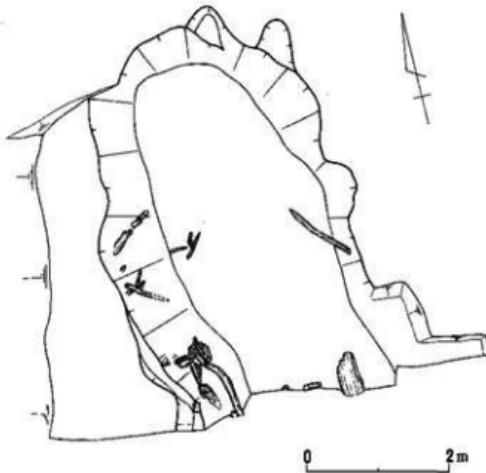


図 36 西区下層遺構実測図 (SK 01)

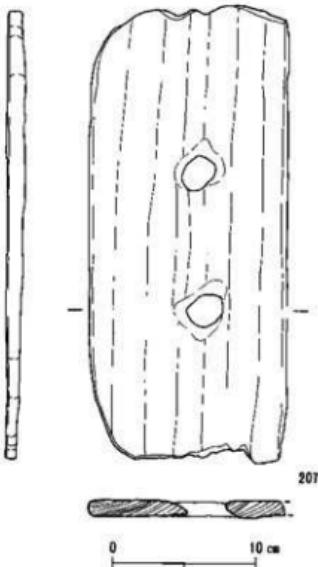


図37 SD 05出土田下駄実測図

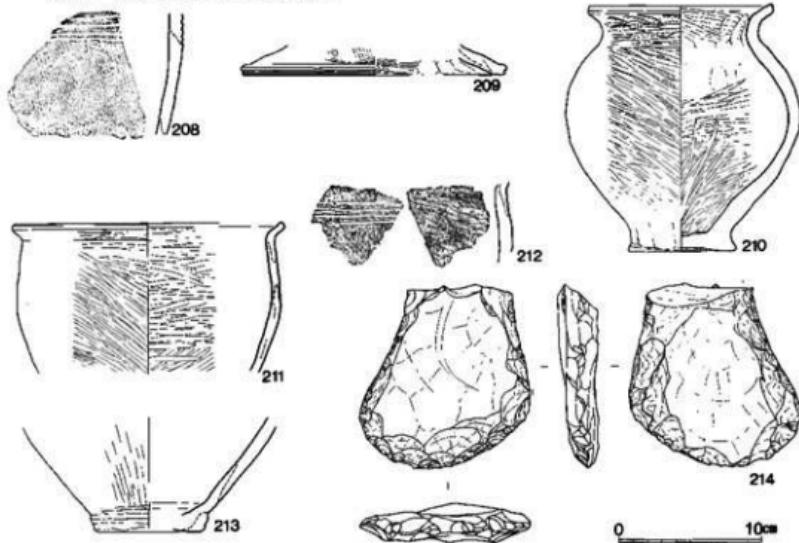


図38 SD 07 (208~210)・SK 01 (211~214) 出土遺物実測図

IV. 北講武氏元遺跡の花粉分析

此松昌彦*

1. はじめに

本遺跡は八束郡鹿島町の講武盆地の北方に位置する。遺跡の周辺は水田地帯であるが北東側に丘陵の尾根がせまっている。調査では縄文時代晚期から古代までの水路跡や古代、中世の水田跡、畦や足跡が発見され、遺物含有層も各時代のものが発掘されている。

本報告では、堆積当時の古植生を推定し、中海・宍道湖周辺の遺跡における花粉分析（大西、1985）をもとにした花粉分带と比較検討して堆積時代について考察した。

なお、鹿島町教育委員会・赤沢秀則氏には試料採取にあたり、様々な面で便宜をはかっていただいた。また島根大学・大西部夫教授には終始御指導いただいた。記して感謝します。

2. 分析試料とその年代

調査区は農道を挟んで東区と西区がある。花粉用試料を東区では西壁北側で6サンプル、西区では西壁から5サンプルを採取した（図1）。

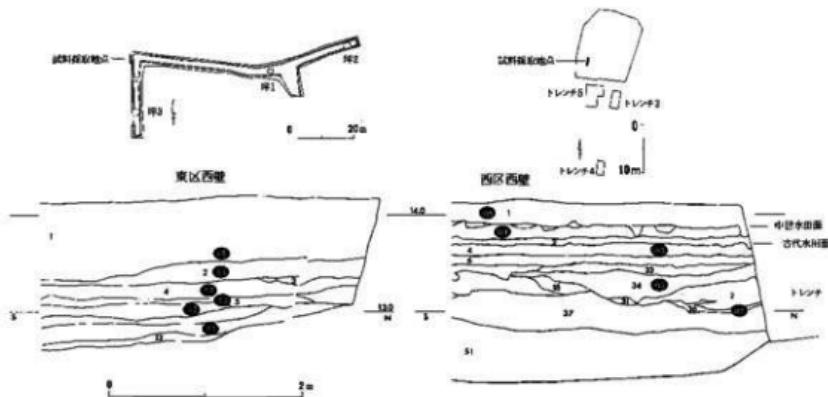


図1 試料採取地点

* 島根大学理学部地質学教室

3. 花粉分析結果

全ての試料は次の過程で処理して、プレパラートを作成した。KOH処理→水洗→重液（塩化亜鉛）分離→アセトトリス処理→封入（グリセリンジェリー）

計測に十分な花粉が得られ、その結果はおもな木本花粉と草本花粉について花粉ダイアグラム（図2）に、その他は表1に示した。なお花粉の出現率は木本花粉の個数を基準として計算した。

〔東区の花粉分析結果〕

全般的に木本花粉ではマツ属が多く、層準によってはアカガシ亜属やモミ属、ニレ属一ケヤキ属などが多くなる。草本花粉ではイネ科とヨモギ属が上部で多い。花粉組成の特徴によって下位から次の4花粉帯に分けられる。

Ea帯（試料番号E1）モミ属、マツ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が多い。

Eb帯（E2～3）アカガシ亜属とシイ属一マテバシイ属が多く、スキ属とヨモギ属も増加する。

Ec帯（E4）ニレ属一ケヤキ属とイネ科が急激に増加し、クマシデ属、ムクノキ属一エノキ属、ヨモギ属も増加し多くなるが、マツ属やコナラ属は減少する。

Ed帯（E5～6）再びマツ属とスキ属が増加するが、ニレ属一ケヤキ属が前帯と変らず多い。アカガシ亜属やコナラ亜属は減少する。

〔西区の花粉分析結果〕

全般的に東区の結果と似ているが、マツ属が安定して多く、最下位層準でスキ属が多い。花粉組成の特徴によって下位から次の5花粉帯に分けられる。

Wa帯（W1）スキ属が圧倒的に多く、マツ属を伴う。

Wb帯（W2）スキ属が減少し、マツ属、モミ属、アカガシ亜属などが増加する。

Wc帯（W3）ニレ属一ケヤキ属とイネ科が急激に多くなる。モミ属やアカガシ亜属などは減少する。

Wd帯（W4）マツ属とクマシデ属が増加する。ニレ属一ケヤキ属も多いが、前帯に比べて減少する。

We帯（W5）アカガシ亜属、ヨモギ属が増加し多い、ハンノキ属も増加する。

4. 考察

東区と西区の遺物からの時代と花粉分帶を対応させて、周辺の古環境について推定する。

縄文時代晩期～弥生時代前期：Ea帯：講武盆地の周辺丘陵には、アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹とマツ属やモミ属の針葉樹が混在した森林を形成していた。遺跡付近の低地ではガマ属など

の挺水植物やタデ属などの水辺の植物が繁茂する湿地になっていたであろう。

弥生時代前期：W a 帯：スギ属花粉の圧倒的な多さと、照葉樹林の花粉がほとんどなく、地層が斜層理を示し、短期間に堆積したもので、遺跡付近の局地的な森林しか反映していない可能性がある。

弥生時代前期～後期：E b 帯・W b 帯：周辺丘陵はアカガシ亜属、シイ属の照葉樹林でおおわれていて、スギ林やマツ林が混在していた。低地ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科を中心とする低温草原が広がってきたであろう。

？～奈良時代：E c 帯・W c 帯：照葉樹林が減少し、ニレ属一ケヤキ属やムクノキ属～エノキ属の落葉広葉樹林が多くなってくる。遺跡付近では水田耕作が始まった。

中世：E d 帯・W d 帯：周辺丘陵の森林破壊が進みマツ林が多くなり、スギ林と落葉広葉樹林と混交するようになった。水田耕作は引き続き行われていたであろう。

中世以降：W e 帯：水田周辺にはヨモギ属やセリ科などの雑草があり、ハンノキ属などの落葉広葉樹林も広がっていたであろう。

東区と西区では全般的に環境の大きな違いはないが、堆積物の供給地の違いにより局地的な植生の反映をうけるため、花粉の出現率は安定しないであろう。

弥生時代以降の中海・宍道湖周辺地域では、大西（1985）により花粉帯をイネ科花粉帯とし、さらに4亜帯に細分されている。それぞれの亜帯とその始まりは、スギ亜帯（弥生時代前期のはじめ）、典型亜帯（古墳時代中頃）、マツ亜帯（A.D 1500年頃）、マツ～スギ亜帯（A.D 1900年頃）である。

これらの花粉分帯と今回の分析結果から比較すると、スギ亜帯は東区のE a 帯とE b 帯、西区のW a 帯とW b 帯に、典型亜帯はE c 帯、W c 帯に、マツ亜帯はE d 帯、W d 帯とW e 帯に対応するものと考えられる。花粉分帯からの年代と遺物からの年代とは矛盾はしていない。

文 献

大西郁夫、1985：中海・宍道湖湖底およびその周辺地域の最上部完新統の花粉分析。

島根大学地質学研究報告、4、115～126。

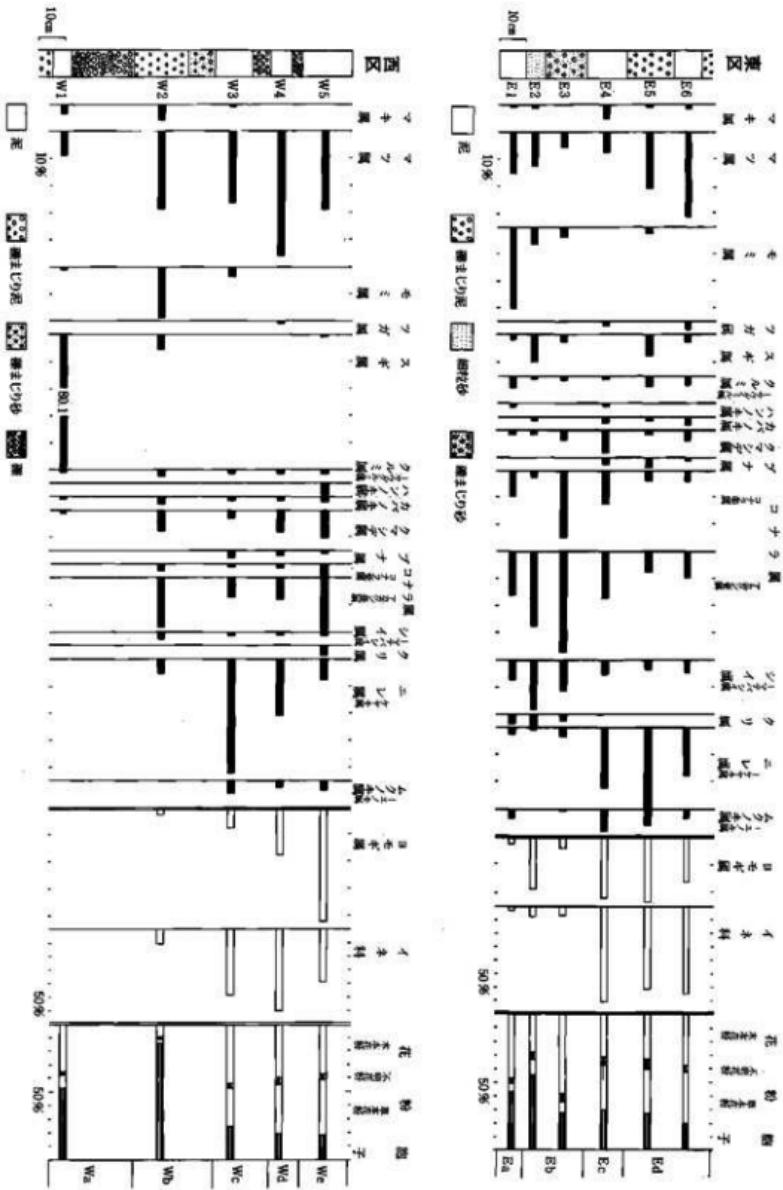


図2 北嶺武氏元遺跡の花粉ダイアグラム

表1 北講武氏元遺跡の花粉(あまり産出しない木本・草本花粉)出現率表

(単位: %)

試料番号	東 区						西 区				
	E1	E2	E3	E4	E5	E6	W1	W2	W3	W4	W5
ヤナギ属			0.6							3.1	1.9
ハシバミ属				1.4							0.9
キハダ属		4.2		1.4		2.0					
シラキ属	2.1	1.8									
カエデ属		1.8									
クロウメモドキ科		0.8									
シナノキ属			0.6					2.6			
イボタノキ属					1.4						
トネリコ属				1.4		1.4			0.5		
ツクバネウツギ属				1.4							
スイカズラ属							2.4				1.0
タデ属 (サナエタデ節) (ウナギツカミ節)	1.7	2.5	0.6	5.0	3.9	7.4	6.8	2.6	5.0	2.5	5.6
(イブキトラノオ節)	0.6									0.5	
ギシギシ属	0.6	0.9									
アカザ科	0.6				1.1	0.8	2.4	7.9			
ナデシコ科			1.9	1.4	3.9	2.0					1.0
アブラナ科					1.1	1.4					
セリ科	1.2	2.5		1.4	6.1	3.0			3.9	5.0	6.5
キク亜科				5.0	1.2	0.7				1.6	1.9
ガマ科	2.5									1.6	
カヤツリグサ科	0.6	8.3	0.6			2.9				1.6	
ユリ科	0.6										

V. 小 結

今年度の北講武氏元遺跡発掘調査では、昭和62年度の分布調査で確認していた縄文時代晩期～弥生時代前期の包含層というばかりではなく、弥生時代から古代・中世に至る水路群や古代、中世の水田の確認など予想外の調査結果を得ることができた。以下、本文中に重複する部分もあるが、成果と課題を簡単にまとめて小結としたい。

東 区

この調査区では、縄文時代晩期の突帯文系の遺物と、弥生時代前期の遺物が出土しており、当地方へ初期農耕文化が伝播し、受容されていく過程を跡づける貴重な調査例といえる。出土した突帯文系の遺物は、胎土や色調、調整の手法で弥生時代前期の遺物と比較的整然と分類できる。また、これらの遺物は、口縁下に貼り付けられる突帯の形状、位置によって新古の二相に分類が可能である。すなわち、口縁下いくぶん離れた位置にしっかりした突帯を貼り付けるものと、口縁部に直接粘土紐を貼り付けるもの、あるいは、口縁からかなり下がった位置に突帯を貼り付けるものとの二者である。一方、弥生時代前期の遺物は、下層出土のものに口縁部にかすかながら段をもつものや口縁端部に刻み目を施すものがあり、弥生時代前期でも前半代にさかのぼらせうる資料である。これら縄文晩期と弥生前期の資料は層位的には分類できない状態で出土しているが、両者は全く別の手法で製作されたものであり、集落で同時に使用されていたかどうかは、今後の集落遺跡の調査、土器編年の確立をまちたい。この東区下層には、水路が存在し、溝内には砂礫が堆積していたことから、当初は水が流れていたものが、洪水によって埋没してしまったものと考えられた。あるいはこの溝は、付近に存在した水田への灌漑水路である可能性がある。水路が埋没して後、その上層に堆積した有機土中からは、第IV章にみるとおり、イネ科の花粉は殆ど検出されておらず、当初、水路から給水される水田があったとしても、この水路を埋没させた洪水によって被害を受け、その場所を移したものと考えられる。

西 区

この調査区では、古代・中世に始まり弥生時代前期まで遡る各時代の水路が検出されている。それはこの付近が、この小谷を南に流れる川から取水して東方へ給水する要所にあったためと考えられる。水路は時代が降るにつれて高所へ移動してゆく。これは、水路が洪水によって埋没してしまう一方、付近に存在する水田も沖積されて徐々に田面を高くしてゆくことに対応するものと考えられる。

特にSD03に遺存していた溜枡状遺構は、本水路から引き入れた水を一時貯え、水路下流にある水田に配水するための施設と考えられ、弥生時代後期の農業土木技術の一端を窺わせる資料であ

る。また、SD05で検出された壠状遺構は、水路中に設けられており、流水の調節を行ったと考えられる資料である。

部分的に検出した水田遺構2面は、上面が中世の水田で、田面に数多くの足跡を残すものであった。この足跡には、子供のものと考えられる小さなものが含まれており、当時の家族で水田経営にあたる姿をうかがわせる好資料であろう。この水田面に残る畦畔は、下層の古代水田と全く同じ位置にあり、水田区画の継承といった面で注目された。この下面にあった古代の水田には、東西および南北にはしる畦畔があり、部分的な検出のため、確言はできないが、条里地割に沿ったものである可能性がある。また、畦畔には、一部途切れる部分があり、水口と考えられる。これら2枚の水田土壌では、これ以下の土層と比較してイネ科の花粉の著しい増加が認められ、花粉分析の面からも、水田であることが補強できるようである。ただ、西川津遺跡(1983)の花粉帶Dや米子市久美遺跡花粉帶①～Ⅱ、IV、VIと比較して、イネ科花粉の比率がやや低いのは、背後に丘陵を控えた立地で、樹木の花粉を多分に混えてしまうためと考えられる。

この奈良時代水田面を検出していた7月13日未明に降った大雨により、調査区を流れる水路が氾濫し、水田面に再び砂が堆積した。13日未明から正午までに降った雨は、鹿島の雨量計で69mmであった(日雨量は95mm)。最も激しい時間雨量が記録されたのは、午前6時台の26mmである。古代と現代を一概には比較できないが、水路網の現代ほど発達していない当時にあって、この程度の雨量でも水路や水田が埋没してしまう危険性の十分感じられた出来事であった。

古代水田面で検出された須恵器蓋の転用硯や、上層で検出された円面硯の小片などは、単なる集落址の遺物とは考えにくく、付近に何らかの公的な施設が存在した可能性がある。

また、西区、東区を通じて、須恵器脚付壺片が出土している。これらは調査区上に位置する向山古墳ないし雉ヶ崎荒神古墳から転落したものと考えられる。向山古墳出土と伝えられる須恵器脚付子持壺(図2)に類似するものの他に趣の異なるもの(134など)も含まれており、異種の子持壺が立て並べられていた可能性も考えられた。



図39 広報かしま7月号

註

1. 山本 清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年）
2. 金間丈夫「島根縣八束郡古浦遺跡」（『日本考古学年報』 16 1963年）
金間丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」（『人類学雑誌』 第69卷3・4 1962年）
3. 山本 清「佐太前遺跡」（『講武村誌』 講武村誌刊行会 1955年）
4. 「志谷奥遺跡」 鹿島町教育委員会 1976年
5. 「講武地区保宮廻場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡」 鹿島町教育委員会 1985年
「講武地区保宮廻場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2」 鹿島町教育委員会 1987年
6. 「講武地区遺跡分布調査報告書1」 鹿島町教育委員会 1987年
7. 「南講武小廻遺跡」（『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1』 鹿島町教育委員会 1986年）
8. 「奥才古墳群」 鹿島町教育委員会 1985年
9. 「菅田考古」 16 島根大学考古学研究会 1983年
10. 「名分丸山古墳群測量調査報告書」 鹿島町教育委員会 1984年
11. 「講武岩屋古墳」（『講武地区遺跡分布調査報告書2』 鹿島町教育委員会 1988年）
12. 「向山古墳」（註11書）
13. 註11書
14. 註11書
15. 註11書
16. 坪井清足、町田 章「奈良時代の遺物」（『出雲國府跡発掘調査概報』 松江市教育委員会 1970年）
17. 柳浦復一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」（『松江考古』 3 1980年）
18. 大西都夫、渡辺正己「1. 西川津遺跡（1983）の花粉分析」
（『朝鈞川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 島根県土木部河川課・島根県教育委員会 1987年）
19. 大西都夫「1節 米子市目久美遺跡の花粉分析」
（『加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 目久美遺跡』 米子市教育委員会・鳥取県河川課 1986年）
20. 松江地方気象台の御教示による。

図版 1



調査地周辺航空写真



遺跡遠景

図版 2



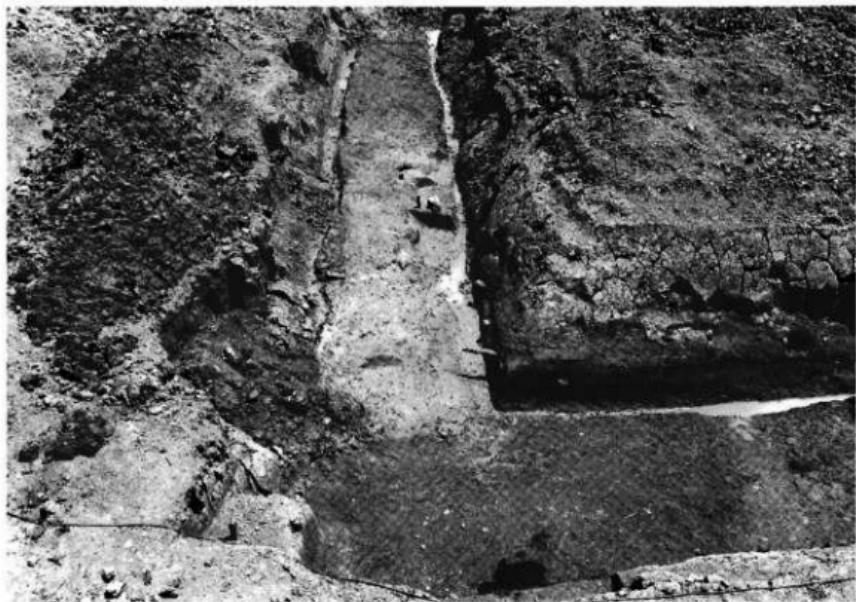
遺跡周辺航空写真（北から）



東区（南東から）



西区（北から）



東区西端（西から）



東区西端（北から）

図版 4



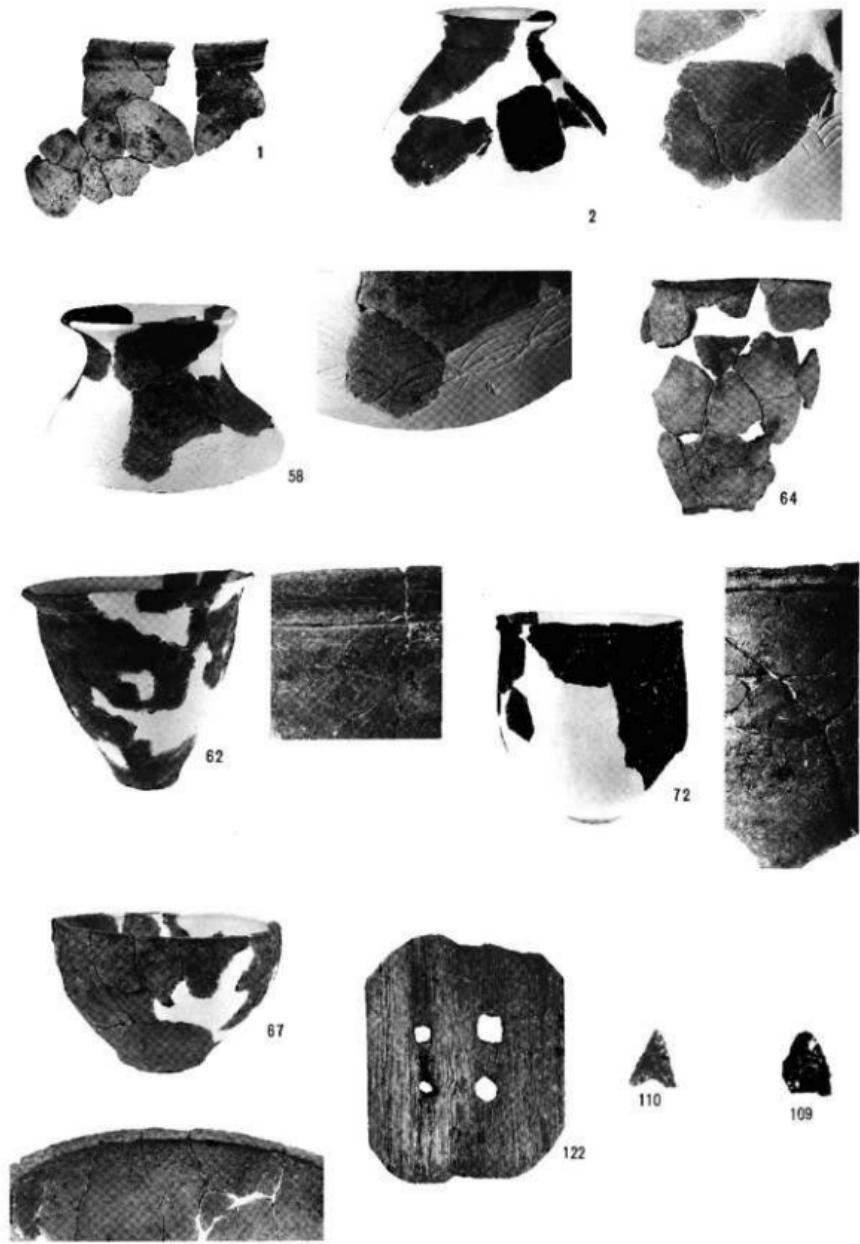
東区遺物出土状況（南東から）



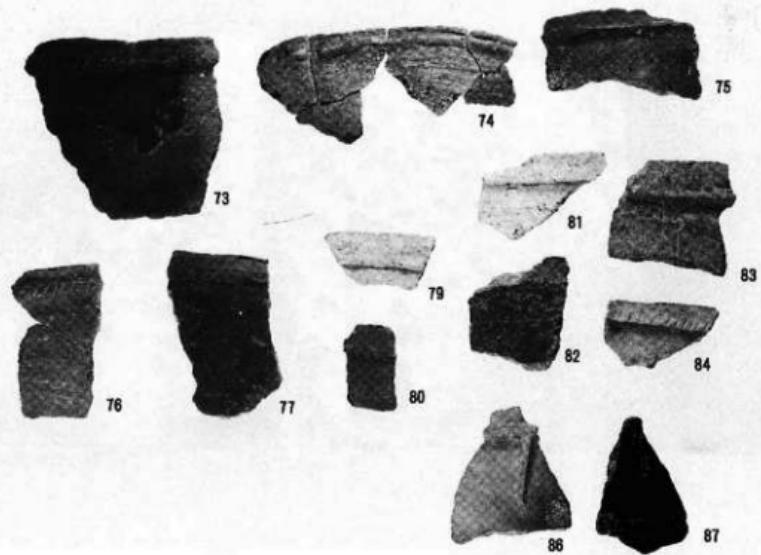
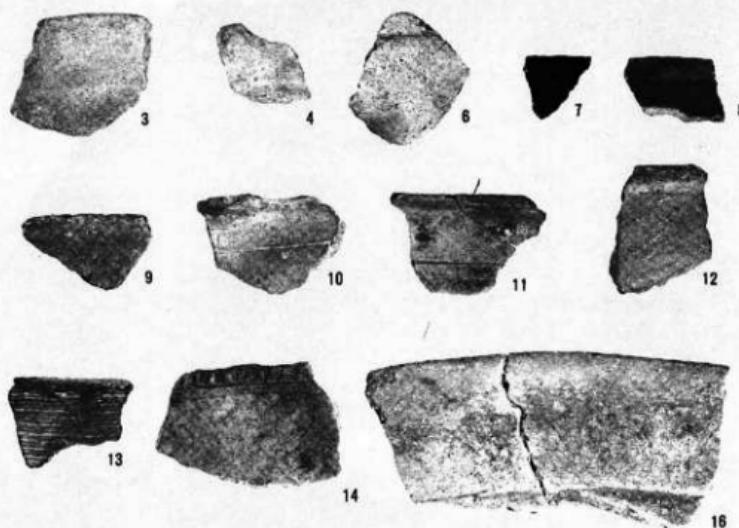
東区SK01（南から）



図版 6



図版 7



図版 8



西区上層造構（北から）



中世水田（西から）

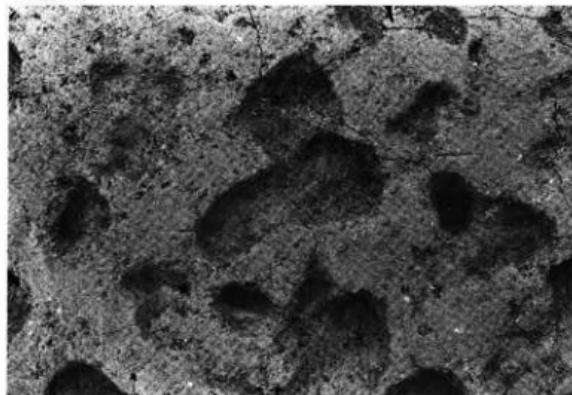


古代水田（西から）

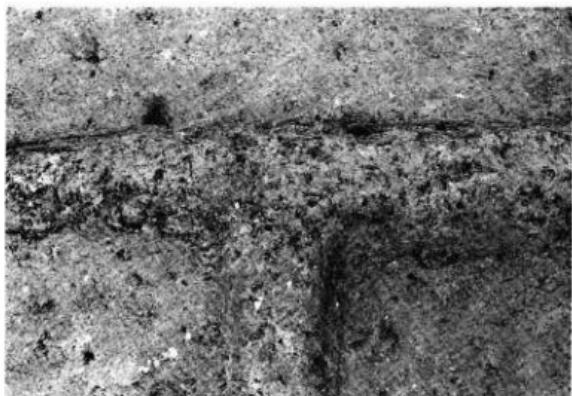


西区土層

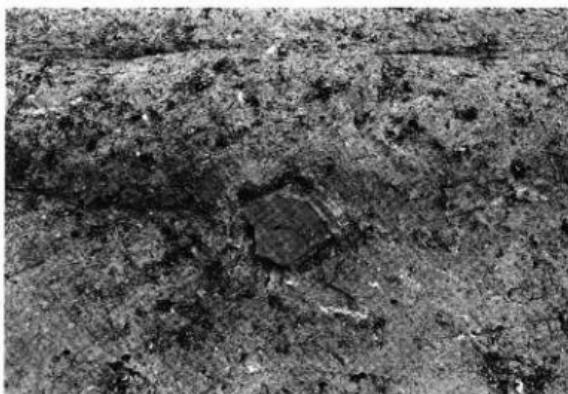
図版 10



中世水田の足跡



古代水田の畦畔



古代水田面
須恵器（196）出土状態

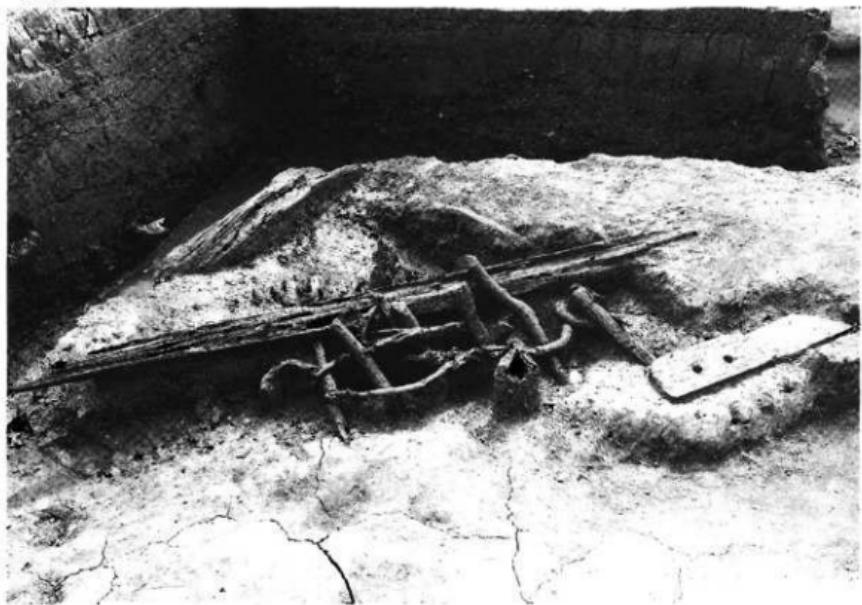


S D 0 3 潜木状造構



潜木状造構背面しがらみ

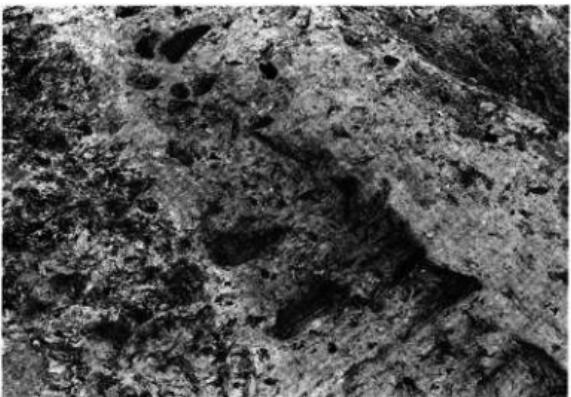
図版 12



SD 05 埋状遺構



西区下層遺構（北から）



図版 14



西区南壁土層



S D O T 遺物出土状態 (210)



西区トレンチ 2



192



196



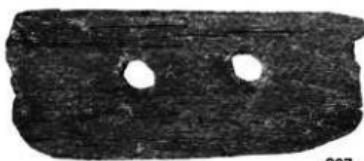
193



202



195



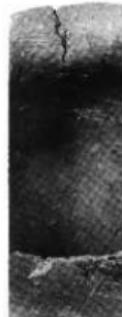
207



210



214



図版 16



西区土壌断面
剥ぎ取り作業



現地説明会風景
(昭和63年 6月25日)



町内小学生見学風景

講武地区県営面場整備事業発掘調査報告書4
北講武氏元遺跡

1989年2月
1997年5月増刷

発行 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 布谷口印刷
松江市母衣町89番地